

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

昔はどう言ったかと， 知りたいとき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): history of expression, modern-classical dictionary, dictionary compilation 作成者: 石井, 久雄, ISII, Hisao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001125">https://doi.org/10.15084/00001125</a>

# 昔はどう言ったかと，知りたいとき

石井 久雄

**要旨：**現代語のある表現・意味を、古代語ではどのように表現していたか。その問題にかかわる研究領域は、表現史として設定されうるのであろう。そうして、その研究の成果の集約として、現代語＝古代語辞典の編集を想定しながら、どのような作業がかんがえられるかを、のべる。(1)語彙研究の成果を検討する、(2)古代語作品の現代語訳を検索する、(3)古辞書を利用する、(4)古語辞典の記述を参照する、というような作業である。

**キーワード：**表現史 現代語＝古代語辞典 辞典編集

**Abstract:** How were expressions of modern Japanese conveyed in classical Japanese? We propose establishing a new field whose purpose is to solve this problem, and call that field “the history of expression.” With the idea of compiling a modern-classical Japanese dictionary, into which the results of research in the field will be incorporated, we offer a practical plan, to include reviewing results of historical lexicology, looking up expressions in modern translations of classical works, using old dictionaries, and consulting classical dictionaries.

**Key Words:** history of expression, modern-classical dictionary, dictionary compilation

## (1) 現代語＝古代語辞典の構想

今のこの表現・意味を、昔はどう言ったかと、知りたくなったとき、現代語＝古代語辞典がそこにあるならば、それをひけばよい。たとえば、つぎにみられるような項目に、であうであろう。内容は相当に省略し、様式はおいおいに(3)ないし(4)節にふれることとするが、みだしの直後は類義語であり、《 》内は現代語の文脈、[ ]内は振り仮名である。

さわがしい [騒], うるさい, やかましい

(奈良)かしまし 「霰降り可志麻の神を祈りつつ」万葉集 20・4370。

(備考)「かしまし」は、この時代では、このような語幹用法しか知られていない。この用例では「鹿島」と掛けている。

(平安)かしまし 「麿 カシマシ 姦 カシマシ」黒川本色葉字類抄。

金葉和歌集, 落窪物語。

かしかまし 「《(鶯は宮中では鳴かないのに) 見すばらしい家の見る価値もない梅の木などには、うるさいくらいに鳴いている》あやしき家の見所もなき梅の木などには、かしましきまでぞ鳴く」枕草子・鳥は。古今和歌集, 宇津保物語, 落窪物語, 源氏物語, 更級日記。

「姦 カシカマシ, カマヒスシ」観智院本類聚名義抄。

みみかまし 栄花物語。

みみかしかまし 源氏物語。

かまかまし 「蟲 言音, 不訥也, 疾言利也, 加万々々志」新撰字鏡。

かまびすし(ク活用) 「鍾鼓, 通衢に嘈噴 [サウサクトカマヒスク]」大慈恩寺三蔵法師伝 1・院政期点, 「四座且らく喧 [カマヒスイ] こと莫かれ」文鏡秘府論・保延 4 年点。

「諠 カマビスシ」図書寮本類聚名義抄, 「姦 カシカマシ, カマヒスシ」観智院本類聚名義抄。

「《やかましく集まって鳴いていた虫の声もやんで、今は嵐の音が激しく聞こえる》かまびすくすだきし虫も声やみて今は嵐の音ぞ激しき」曾丹集。

かまみすし 「諠 可万美寸之」承暦本金光明最勝王経音義, 「謹譚 カマミスシ」図書寮本類聚名義抄, 「衆に譚 [カマミス] き威無かれ, 欽め, 念へ」大唐西域記 7・長寛元年点。

さわがし 「《空が曇ってきて、風が大変やかましく吹いて》空うち曇りて、風のいとさわがしく吹きて」枕草子・九月つごもり。大和物語, 源氏物語, 更級日記。

「仏語の闕 [サワガシカラ] ぬを浄と為」法華義疏 2・長保 4 年点。

さわがはし 「論罵 口無摂言也, 乱語也, 多言也, 彌太利加波志, 彌太利已止, 又佐和加波志, 又左比左比之」新撰字鏡。

らうがはし 蜻蛉日記, 源氏物語, 栄花物語。

(備考) 和文系統の「かしかまし」と漢文訓読系統の「かまびすし」とが、対立している。曾丹集の「かまびすし」は特別である。「かしかまし」は、江戸時代以降、「かしがまし」となる。「かまびすし」は、ここではク活用であるが、鎌倉時代以降、シク活用となり、江戸時

代に再び活用をも見せる。類聚名義抄2本に見える「かまびすし」の活用は、どちらか、確実な判断ができない。

(鎌倉)かしまし 仙覚抄。

かしかまし 徒然草, 宇治拾遺物語。

かまびすし(シク活用) 「《波の音はいつもやかましく, 潮風は特に激しい》波の音常にかまびすしく, 潮風ことに激し」方丈記, 「《(福原の都は,) 波の音がいつも騒がしくて, 潮風の激しい所である》波の音常はかまびすしく, 潮風激しき所なり」平家物語5・都帰。源平盛衰記, 沙石集, 桜井基佐集。

らうがはし 「《(面白がって) 皆が一緒に大声で笑うのは, 大変騒がしい》皆同じく笑ひののしる, いとらうがはし」徒然草・56。

(室町)かしまし(い) 雲形本狂言・素襖落, 虎明本狂言・鞍馬参り, 中華若木詩抄。

日葡辞書。

かしかまし(い) 曾我物語。日葡辞書。

みみがましい 日葡辞書。

かまびすしい(シク活用) こんてむつすむん地。日葡辞書。

さわがはし 「論罵 サヒサヒシ, サハカハシ, ミタリカハシ」節用集・伊京集。

そうぞうし(い) 「忽々 ソウゾウシ」節用集・饅頭屋本。日葡辞書。

そうぞう 日葡辞書。

(備考)「そうぞうし」は、語源・仮名遣いについて、説がある。饅頭屋本節用集の例を、そのまま語源・仮名遣いとして認めるべきか。

(江戸)かしましい 「《取りまぜてうるさい最中に》取りまぜてかしましき中に」世間胸算用5。

かしかましい 西鶴名残の友, 談義本風流志道軒伝。

みみがましい 浄瑠璃・七小町。

みみがましい 浮世草子・好色一代女, 読本・椿説弓張月。

かまびすい(ク活用) 浄瑠璃・国性爺合戦。

さわがましい 歌舞伎・伊賀越乗掛合羽。

そうぞうしい 三河物語, 浮世草子・好色一代男, 浄瑠璃・心中天の網島, 浄瑠璃・滝口横笛, 洒落本・仕懸文庫。

やかましい 御伽草子・鏡男絵巻, 浄瑠璃・鎧の権三重帷子, 三冊子・赤双紙, 松翁道話。

(明治)かしましい 和英語林集成。

かまびすしい(シク活用) 田山花袋・田舎教師。

かまびすい(ク活用) 仮名垣魯文・安愚楽鍋。

そうぞうしい 坪内逍遙・当世書生気質, 森鷗外・金毘羅。

やかましい 夏目漱石・坊っちゃん。

(方言)かまびしい 徳島県。

「うるさい」が記述にあがらない理由は、(3)節にふれるであろう。

国語辞典のような言語辞典のひとつの典型は、語をみだしとし、その意味を歴史的にたどるものである。ここにいう現代語＝古代語辞典は、意味をみ

だしとし、それを表現する語群を歴史的にしめすものである。意味というものが、単純にみだしをたてられるようなものではないから、現代語の語で代用するのである。歴史的国語辞典も、みだしを主として現代語にとることができ、そのみだしのみをみるかぎりでは、この現代語＝古代語辞典も、おなじいが、解説部分は、一方がみだしの意味の歴史をしるすのに対し、他方はみだしの表現の歴史をたどって、ことなることになる。

ちまたに外来語があふれていると、今日、よくいわれるところであるが、たとえば、清少納言ならば、和語ないし漢語でどう表現したであろうか。やはり現代語＝古代語辞典がそこにあるならば、『枕草子』のうちの表現として、つぎのようなものをひろいあげることができるのではないかとおもわれる。現代語をみだしとして、その直後の〔 〕については(3)節にのべる。あとに古代語をかかげ、その〔 〕は漢字表記の大体または漢字表記のよみをしめしている。

ウォッシング てうづ〔手水〕  
エグゼクティブ かんだちめ〔上達部〕  
オーディエンス〔客席〕 聴聞衆  
オーバー・だ こちたし  
オフィス〔宮仕先〕  
みやづかへどころ〔宮仕所〕  
ガードマン 陣  
カジュアル・だ かろぶ〔軽〕  
銀の・カップ かなまり〔錠〕  
カラフル・な いろいろ〔色色〕の  
キャッチする まちつく〔待付〕  
キャリア 女房  
ギャルソン をのこ〔郎等〕  
午前・コース あさがう〔朝講〕  
コーディネート あはひ〔間〕  
コピーする かきうつす〔書写〕  
シーズン ころ〔頃〕、とき〔時〕  
シャットアウトする へだつ〔隔〕  
ジョーク そへごと〔諷言〕  
シロップ あまづら〔甘葛〕

スタイル すがた〔姿〕  
スペース ひま〔隙〕  
セクシー・だ いろ〔色〕なり  
セッション〔演奏〕 あそび〔遊〕  
きちっと・セットする かいすう〔据〕  
ゼロ・になってしまう うす〔失〕  
センス〔感覚〕 ころ〔心〕  
チャーミング・だ らうらうじ  
ティッシュ たたうがみ〔畳紙〕  
テーマ ころ〔心〕、題  
ドア 障子  
トーン〔色彩〕 いろあひ〔色相〕  
ノート・などする  
かきうつし〔書写〕などす  
ノック・する たたく〔叩〕  
パブリック おほやけ〔公〕  
ハンサム・だ〔美形〕  
かたち〔容貌〕よし  
ファッション 装束  
ファンタスティック・だ めづらし〔珍〕

フォーマル[儀式]・用の  
もののをり[物折]の  
プライベート わたくし[私]  
ブラッシング けづりぐし[梳髪]  
ブルー[花色] はな[花]  
プレイ[演奏]する あそぶ[遊]  
ヘア かしらつき[頭付], 髪  
ポスト[官] つかさ[官]  
メイク[化粧]・をする 化粧ず

メッセージ 消息  
モチーフ[縁] 縁  
神楽の・リーダー  
神楽の人長[にんぢやう]  
リハーサル 調楽[でうがく]  
リラックスする なる[馴]  
レクチャー 説経  
ロマンチック・だ すきずきし[好好]

(\*)

今の表現・意味を、昔はどう言ったかと、知りたくなるとき、それは、語源をじりたくなるときと同様に、単純にそういう知的好奇心がわいてきたときであることもある。あるいは、みずからの日用の表現をすこしまじめにかえりみたり、西洋古典語学習の作文水準にならって古代語の素養をたかめたり、しようとするときであることもある。あるいは、いささか気取って文章をつづってみたくなったり、作歌で同義語をひろく検討したくなったり、したときであることもある。今の表現・意味を、昔はどう言ったかと、しることは、学術的にとらえるならば、語史すなわち語の意味の歴史に対して、表現・意味の歴史を構想するということである。

昔はどう言ったかと、知りたくなったとき、現代語＝古代語辞典は、しかし、いま、実は存在していない。それならば、いま、なにをすることができるのであろうか。いいかえるならば、表現・意味の歴史を構想し、現代語＝古代語辞典を編集しようとしたら、どのようなことが必要であらうか。特にくだんの辞典編集を軸として、つぎのようなことをかんがえてみようというのが、本稿の趣旨である。

従来の辞典類および研究

古代語作品の現代語訳、古辞書、古代語辞典の検索

現代語＝古代語辞典編集上の問題

語についての研究の成果を、国語辞典は集約的にしめすという。現代語＝

古代語辞典も、表現・意味についての研究の成果を集約したものであるべきであろう。語の研究のかなめは体系性を想定するところにあつて、そのうゑに語彙史を構想しようとみうけられる。そのように表現の歴史を構想しうるかいは、表現ないし意味の体系性をどのように構想しうるかにかかつているであろう。語源ないし語彙史とことなり、われわれにとっては、しかし、この表現の歴史についての欲求ないし観念すら、ただちには理解することができないかもしれない。そうした欲求ないし観念がありうるのであるということ、いまだ十分な知識としてもっていない、そのことが、不理解の原因であるのではないかともおもわれる。

## (2) 従来の辞典類および研究

現代語＝古代語辞典は、表現ないし意味の歴史をたどることができるように、編集される。そのような辞典はいま存在していないが、当代語をみだしとして、それに対応する古代語をかかげたという辞典などは存在する。その当代語は俗語といわれ、古代語は、特に平安王朝用語をさして、雅語とよばれた。すなわち、俗語＝雅語辞典が、江戸時代から明治・大正時代までに、いくつかが刊行されている。編集の趣旨は、おおむね、和歌をよむ際の参考のためである。

江戸時代に俗語＝雅語辞典としてどのようなものがあつたか、ということについて、われわれの知識は、雅語＝俗語辞典のものをふくめて、いまだに福島邦道(1969)「雅俗語対訳辞書の発達」をでることができないでいる。その俗語＝雅語辞典は、つぎの2点である。

富士谷御杖(1792寛政4年) 詞葉新雅。

東条 義門(1814文化11年) 類聚雅俗言。

しかも、これらについての研究はすくなく、また、その内容も、そこにみられる俗語を近世語として評価するという、オーソドックスな言語学のたちばにあるといつてよい。そのかぎりでは、俗語＝雅語辞典と雅語＝俗語辞典とに、利用価値の差がなく、また、富士谷成章『あゆひ抄』『かざし抄』あるい



は本居宣長『古今集遠鏡』のような、古典文芸の当代語訳も、同様の利用価値をもつ。そうした研究の概況については、湯浅茂雄（1988）が序文で総括しているところによってしられるであろう。

なお、福島「雅俗語対訳辞書の発達」は、関連させてつぎをあげていて、その価値については、今西浩子（1982）によるのがよいかとおもわれる。

藤井 高尚（1802享和2年） 消息文例。

この『消息文例』は消息の用語にかかわるものであるが、書簡の文章については、一通ごとに、俗文すなわち候文の全体と、雅文すなわち消息文とを対照させる、あるいは口語体とを対照させるような、ひとつのゆきかたがある。つぎのようなものであり、明治のものもあわせてここにあげる。

黒沢 翁満（1849嘉永2年） 雅言用文章。

三田村楓蔭（1907明治40年） 言文対照 書簡文三ヶ月速成。

俗語＝雅語辞典は、明治・大正時代には、それにたぐいするものをふくめて、おそらくすくなくならず、出版されている。そのうちには『詞葉新雅』の翻刻をおさめたものがあると、山田忠雄（1981）『近代国語辞書の歩み』（p.501）がつぎの2点を指摘している。前者は『詞葉新雅』の全文をおさめ、後者は抄出している。

小田 清雄（1891明治24年） 雅俗対訳 国語のしるべ。

羽山 和卿尚徳（1891明治24年） 普通教育 和文初学。

『和文初学』は、一書全体としては、辞典ではなく、文章作法書である。この著者には、また、これにききだって、つぎの和歌作法書があり、やはり、『詞葉新雅』の抄出をしている。

羽山 和卿尚徳（1883明治16年） 和歌俳諧 歌語粹金。

江戸時代のものに直接によるのではなく、俗語＝雅語辞典をふくむものとして、つぎがある。

服部 元彦（1890明治23年） 雅俗俗雅 日本小辞典。

弾 舜平琴緒（1891明治24年） 俗語雅調。

田沢 景忠（1911明治44年） 懷中用稲廼門 俗雅辞典。

『日本小辞典』は、雅語＝俗語辞典と俗語＝雅語辞典とを、合本にしたものであり、両者の関係については、つぎの山田『近代国語辞書の歩み』の引用を参照されたい。『俗雅辞典』に対して、田沢景忠は、同時に、『雅俗辞典』を編纂しているが、『俗雅辞典』の俗語と『雅俗辞典』の俗訳とのあいだ、あるいは同様に雅語と雅訳とのあいだに、直接の関係をみいだすことはむずかしく、つまり、ふたつの辞典は、相互に独立性をたもちつつ編纂されたもののようである。

以上にあげた、江戸時代、明治・大正時代の俗語＝雅語辞典についての、山田『近代国語辞書の歩み』の評価をききたい。

「純粹に口語見出しを文語で解する辞書は今日まで殆ど作られていない。恐らく其の必要が感じられなかった為であろう。嘗て作られたのは、古色蒼然たる俗雅対照辞書である。かような者は江戸時代の詞葉新雅・類聚雅俗言を以て嚆矢とし、明治期に日本小辞典、及び俗語雅調・俗雅辞典など少数を算する。前者は雅俗の部を改編して成ったもので文学用語に傾き、後者はより一般的な用語を宗とする。特に俗雅辞典の実用性は注目されてよい。」

(pp.1745-1746)

その他、明治・大正時代のものとして、総郷正明・朝倉治彦（1977）『辞書解題辞典』にひろうことのできるものに、つぎがある。

佐々木弘綱・佐々木信綱（1897明治30年） 詠歌辞典。

松平円次郎・山崎 弓束・堀籠 美善（1909明治42年） 俗語辞海。

古川喜九郎（1912大正元年） 口語文語対照辞典。

鈴木 周作（1925大正14年） 実用音引 作文辞典。

このうちの『俗語辞海』については、山田『近代国語辞書の歩み』(pp.705-711)に、類語辞典の濫觴として、なぜ口語文語対照辞書の形式で生じたのか、どのような内容であるのか、くわしくとかれている。

俗語＝雅語辞典のかたちではなく、類語辞典の一部として古代語をとりこんだものがある。汎時的な水準においては、現代語表現と古代語表現とが類義の関係をもつとすることは、当然にありうるたちばである。方言による表

現なども、それにならぶであろう。そのような辞典は、つぎである。

志田 義秀・佐伯 常麿（1909明治42年） 日本類語大辞典。現在、  
講談社発行、講談社学術文庫。

横山 青娥（1929昭和4年） 詩歌作文 類語辞典。

広田栄太郎・鈴木 棠三（1955昭和30年） 類語辞典。東京堂出版発行。  
古代語・方言などをかかげる理由は、最初のものではいわれていないが、あとのふたつではいわれていて、類義関係の理論にもとづくことにあるよりは、和歌などの実作に対応することにあるようである。広田・鈴木『類語辞典』の「まえがき」についてみるならば、つぎのようにある。

「本書は、漢語・和語・古語・俗語・敬語・方言・成句などにわたって、ひろく類語・同意語の見地から、整理案配すると同時に、……。また、和歌・俳句・詩を作る人の便宜のために、花ことば・枕詞・季題などの一覧を、付録として掲げました。」

ところで、俗語＝雅語辞典のみなもとに位置するとみることができる『詞葉新雅』『消息文例』には、出典についての言及がある。明治・大正時代以降、それはうしなわれてしまったようである。学術的なたちばかりするならば、後退である。そのような点において学術的な水準をたもちつつ、類義表現をまとめたものは、方言辞典であった。方言研究にとって基本的に必要であるからであろう。そのことにたちいることは、しかし、本題でないので、紹介は簡略にとどめる。この方面の先蹤、越谷吾山『諸国方言物類称呼』にもふれず、類似のものにもふれない。

はじめに、つぎをあげたい。

平山 輝男（1960昭和35年） 全国アクセント辞典。東京堂出版発行。  
アクセント辞典をはじめにあげるのは、奇矯にみえるかもしれない。しかし、この辞典の特色を列挙した「はじめに」に、つぎのようにあって、共通語＝方言辞典の意義がよくとらえられ、現代語＝古代語辞典にも参考となる。

「第三には共通語以外に、全国代表地区の発音・アクセントを比較表にして示した。自分の郷土の発音・アクセントが共通語と比較して、どういう位置

をしめているかを自覚することは、学問的に重要であるばかりでなく、共通語の発音・アクセントの体系を習得するうえには、きわめて大切な条件である。

「第四には、全語について、京都と鹿児島のアクセントを符号によって示した。……。この歴史的つながりをたどり、地方語相互の対応関係を知るとは、学問的にはもとより重要なことであるが、教育的にも興味をそそり、前記第三の項とともに、共通語アクセントを習得するうえには、きわめて効果的であろう。」

いわゆる方言辞典としては、つぎがある。

東条 操 (1954昭和29年) 標準語引 分類方言辞典。東京堂出版発行。

尚学図書 (1989平成元年) 日本方言大辞典 索引。小学館発行。  
ともに、語彙の排列の基準を意義分類においているが、また、排列の基準を五十音順にとって、当の対象が意義分類のどこに配置されているかをしめす手段をも併用している。このふたつが全国諸方言を対象としているのに対して、つぎは一方言を対象としている。

上村 幸雄・島袋 盛敏 (1963昭和38年) 国立国語研究所資料集 5 沖縄語辞典。大蔵省印刷局発行。

この辞典は、共通語＝方言辞典の部分で、共通語の排列の基準にもっぱら五十音順をとっている。この辞典は、そのほか、現代語＝古代語辞典にとっても、作成上また使用上に一般的に生ずる問題を、集約的にのべていて、あとの(4)節で、ふたたびかえりみることにする。

(\*)

表現・意味の歴史の研究は、語史・語彙史の研究にくらべるならば、寥寥としているが、すぐれた業績もえられている。前田富祺(1985)『国語語彙史研究』である。そこに結晶するにいたる古典的業績、前田富祺(1967)は、つぎのようにはじまっていた。

「語史研究には、語形変化と語義変化の研究が考えられる。どちらも単語を中心に考えてゆくのであるが、単語を離れてみると、ある事物、ある意味をあらわす言葉がどのようにかわってゆくかを調べる立場もある。つまり、名称の変化、よび方の変化である。このような調査は、方言学においてはよく使われるものであるが、国語史の分野ではそれほど使われていないようである。

「語史を体系化して語彙史を考える時には、形態を中心にしたものと意味を中心にしたものとが考えられる。ここでは、意味を中心にした立場を考えたのである。形態では単語を単位とすることが出来るが、意味の場合はどうであろうか。泣く場面、笑う場面の表現とか、色彩、動植物、身体などの名称とかを一つの場として考えることが出来よう。」(p.41)

この印象的な一節は、論文が『国語語彙史研究』に収録されるにあたって、すべて削除されてしまったが、このモチーフこそ、『国語語彙史研究』の全体をおおうものであり、また、それゆえに、この一節は削除されることになったのである。『国語語彙史研究』にいたるまでに、ここの「意味を中心にした立場」は、前田富祺(1980 b)にみられる、「意味分野を限定して語彙の部分体系を明らかにする」(所収書 p.81)方法といった概念に、抽象化されている。山内洋一郎(1982)は、その方法による語彙史に、分野語彙史の名称をあたえている。

前田の構想する方法が、いま問題にしている表現・意味の歴史をたどる諸方法の、有効なひとつであることは、もはや、いうにおよばない。作業としてはおなじでありながら、前田の語彙史は、語史のいわば関数として意味をとらえようとし、ここでの表現・意味の歴史は、意味の関数として表現のかたちをとらえようとする。表現のかたちというのは、語に限定されず、語句でもよく、文法的形式でもよい。

前田の構想する語彙史研究は、いうまでもなく、『国語語彙史研究』にもっともよく実現されている。しかし、前田の前後にも、それにならべてよいであろう業績がある。前田もしばしばふれているように、宮地敦子(1979)『心

身語彙の史的研究』は、そのもっともよくまとまったものである。宮島達夫（1987）『雑誌用語の変遷』は、林大（1964）『分類語彙表』によって意味分野を設定することにより、近代・現代の期間のうちでながら、広汎な語彙・表現をあつかうことに成功している。また、言語地理学には、いちじるしい成果があるとみうけられる。言語地理学は、さきの前田（1967）にもあるとおり、柳田国男『蝸牛考』のような古典的名作においてそうであるように、もともと、意味に対する語ないし語形の変遷をたどるものである。国立国語研究所『日本言語地図』以来、文献による国語史と関連させた研究が、とみにさかんにおこなわれるようになってきている。そうした研究文献をあげることは、もはや一切省略にしたがう。現代語＝古代語辞典は、言語地理学の成果をもとりいれ、同様に位相論の成果をもとりいれるならば、日本語総体の表現の辞典へと展開することになる。

### （3） 古代語作品の現代語訳、古辞書、古代語辞典の検索

表現・意味の歴史を研究するための資料となるものの第一は、古代語作品の現代語訳である。(1)節に、『枕草子』の現代語表現のうちの外来語としてかかげたものは、橋本治（1987年）『桃尻語訳枕草子 上』（河出書房新社発行）からひろいあげてある。そこで、みだしの直後に[ ]のあるものは、実は、本文が[ ]を本体とし、みだしが振り仮名となっている。

そこには文脈をしめすことをしなかったが、古代語作品の現代語訳の利点は、ある表現が、他のどのような表現とともに、どのような意味をになっているのか、具体的に了解することができるところにある。もとより、古代語作品のその古代語を、ただちに表現・意味の資料とするのが、正当であるようにおもわれそうである。しかしながら、古代語には、文献学的解釈がともなわなければならない、その解釈の総決算が、解釈者の言語への全訳であるとかんがえられるのである。すなわち、萩谷朴（1977年）『枕草子 上』（新潮社発行、新潮日本古典集成）は、本文の注釈に先行研究を参照することについて、つぎの発言をしている。

「本文解釈の総決算たる全訳を附したものでなければ、その解釈の当否を最終的に判断することができない」(p.14)

言語作品が全体で作品として成立しているのならば、言語分析も、作品全体について実行するのが理想である。そのための道具として、たとえば文脈つき用語索引 KWIC/KWOC を作成することもかんがえられるであろう。つぎのみひらきにしめたのは、源氏物語桐壺の冒頭部の、円地文子現代語訳『源氏物語』(1980年、新潮社発行、新潮文庫)と玉上琢弥校訂原典『源氏物語』(1964-1975年、角川書店発行、角川文庫)との KWIC を対照させたものの、一部である。左ページが現代語訳であり、その用語 Key Word について、出現して表記されたかたちのまま、便宜 JIS 漢字符号の番号の順序にしたがって、排列してある。最上行「揃って」は、右ページの最上行をたどり、古代語原典において「うち具し」と表現されているとしられるのである。表現をどのように分節してゆくかを決定し、『源氏物語』の現代語訳および原典の全文を処理して、五十音順に排列する、といった作業は、もっぱら労力と時間とにかかわる問題である。

古代語作品の現代語訳を検討するについては、しかし、現代語のがわの問題と、古代語のがわの制約と、ふたつのことをかんがえておかなければならないであろう。

現代語のがわの問題というのは、現代語として翻訳しうる表現には多様なものがあり、いまそこにみえている翻訳がもっとも適切であるか、というものである。この問題が端的にみえるのは、現代語訳をいくつかならべてみることができるときであり、翻訳者によって表現に相当のひらきが生じるものであって、どのような語彙・文体などに照準をあわせるか、なんらかの選択の基準が必要となるのである。『源氏物語』の種類の現代語訳をめぐるくだんの問題については、石井久雄(1986)に直感的な指摘があり、蓮見陽子(1991)に数量的な分析がある。翻訳がひとつしかないとき、あるいはいくつかあったにしても、その翻訳の表現が適切であるかいなかを、つねに判断していなければならないかもしれない。

翻訳にどのような抑制がはたらくか、現代語への翻訳については検討されていないようであるが、江戸時代における江戸時代語すなわち当代語への翻訳については、検討がなされている。林巨樹ほか（1980）は、本居宣長『古今集遠鏡』の当代語訳について、つぎのように指摘している。

「なんらかの目的で伝達の機能を果さんがために口語文を綴るのではない以上、純粹の口語でなく、原歌からの訳文[うつしぶみ]という制約をもつ。原歌を捉え対象化し、それにふさわしい口語を宣長のなかで構成しなおすという一種のフィルター（濾過過程）のかかったものであるかぎり、真に生きた口語の姿とは言いがたい。」（p.143）

また、古代文芸作品の翻訳ではなく、雅語辞書の、雅語解説に相当する俗語をめぐるものであるが、湯浅茂雄（1988）は、鈴木朗『雅語訳解』の俗語についてつぎのようにいっている。この方針は、『古今集遠鏡』をうけつぐものであるという。

「もとより、雅語の俗語訳という作業は、知的な、また、内省的な言語生活の所産であり、そこにあらわれる俗語が、そのような言語生活の質に即した位相を持つのは当然であろう。その位相性とは、一つには、……、学問の世界のものとしての通用性ということが考えられる。……、なるべく広い地域に通用する標準的な俗語が要求されたのであろう。また、これと表裏するが、文語、とりわけ、雅語に対するものとしてのふさわしさ、品格の点が考えられる。……、まさに現前する生の俗語よりも、やや日常性から離れた保守的な層の俗語が選ばれやすかったものと考えられるのである。」（pp.174-175）

ついでをもって付言する。うえに引用した萩谷『枕草子 上』が、その引用のすぐまえに、つぎのように翻訳の理想としていっているのは、あきらかにいさみあしである。

「流暢な現代口語訳であると同時に、原文の語数や順序を加減も顛倒もせぬ逐語訳をとという理想を実現する」（p.12）

なお、現代語作品の一作品全体にわたる言語分析というものが、どのくらいなされているのか、しるところがない。古代語の研究は、一作品の全面的



ひとであった。現在、両親 10180810 揃って、はなやかに世を張っている家から入内さ  
 した。歴とした更衣として、 10190503 他から 立てられるはずであったし、自身もそれ  
 な様子かと日柄の立つのを 10181508 待ちかねて、 急いで召し寄せて御覧になると、襷  
 御方」と世間でも重く見て 101901104 大切に お仕え申しているが、この新しい御子の輝  
 は一の御子を表向き一通り 10190208 大切になさるけれども、この若宮は格別御秘蔵に  
 の日々を送っていた。父の 10180707 大納言は もう亡くなっていたが、母親の北の方は  
 のとも思われぬほど美しい 10181502 男御子を この更衣はお生みになった。帝はどんな  
 く御所にあがっていられる 10170606 中に、 さして高貴な身分というではなくて、帝の  
 のことひとかたではない。 10171004 朝夕の 宮仕えにつけても、始終そういう女人たち  
 と、襷襟の間ながら世にも 10181605 珍しい 御器量である。一の御子は右大臣の女御が  
 は、身のほど知らぬ女よと 10170806 爪はじきして 妬まれるし、そのひとと同じくらい  
 ていられるのであったが、 10190602 帝が 御寵愛のあまり無理にも側に引きつけてお置  
 ばかりであるが、唯一つ、 10180505 帝の 御愛情の世に類いないまで深く濃やかなのを  
 母君の御息所も、もともと 10190402 帝のお側にいてお身の周囲の御用を足す 上宮仕え  
 な身分というではなくて、 10170704 帝の御寵愛を一身に鍾めている ひとがあった。／  
 の更衣はお生みになった。 10181505 帝は どんな様子かと日柄の立つのを待ちかねて、  
 ば里下りの度重なるのを、 10171207 帝は やるせないまでに不憫なものと思召され、い  
 較ぶべくもなかったので、 10190204 帝は 一の御子を表向き一通り大切になさるけれど、  
 から事が起って、ついには 10180107 天下の乱れとなるような、 よろしからぬことがあ  
 なのであった。／上達部や 10171602 殿上人なども、次第にこの話になると不服らしく  
 知らぬ女よと爪はじきして 10170901 妬まれるし、そのひとと同じくらい、まだそれよ  
 寵愛ぶりですな」「左様、 10180102 唐土でも、 こういう女の間違いから事が起って、  
 って「これこそ間違いなく 10181708 東宮に立たれる 御方」と世間でも重く見て大切に  
 れるようになってくると、 10180405 当の更衣の身にすれば、 聞きづらく、居たたまれ  
 て妬まれるし、そのひとと 10170903 同じくらい、 またそれより一段下った身分の更衣  
 った。帝はどんな様子かと 10181507 日柄の立つのを 待ちかねて、急いで召し寄せて御  
 かに世を張っている家から 10180905 入内された 方々にも劣らないように、御所での晴  
 さの増える御様子で、人の 10171307 批難など 一切気かけようともなさらない。まっ  
 世のものとも思われぬほど 10181406 美しい 男御子をこの更衣はお生みになった。帝は  
 ったので、帝は一の御子を 10190206 表向き 一通り大切になさるけれども、この若宮は  
 かなのを頼みの綱として、 10180605 表面は この上なくみやびやかに見える後宮の女人  
 もあったろうか、だんだん 10171201 病いがちに なってゆき、何となく心細そうにとも  
 も、次第にこの話になると 10171605 不服らしく 眼をそらすようになって、「いや、ま  
 を、帝はやるせないまでに 10171301 不憫なものと思召され、いよいよいとるの増さ  
 仕えの日々を送っていた。 10180706 父の 大納言はもう亡くなっていたが、母親の北の  
 かき乱し、その度に恨みを、 10171105 負うことの 積りつもったためでもあるだろうか、  
 、当の更衣の身にすれば、 10180501 聞きづらく、居たたまれぬ思いのする ことばか  
 ることもひとかたでない。 10190310 母君の 御息所も、もともと帝のお側にいてお身の  
 はもう亡くなっていたが、 10180801 母親の 北の方は由緒ある家柄の出の折目正しいひ  
 そはと心騒がしていられる 10170804 方々からは、 身のほど知らぬ女よと爪はじきして  
 っている家から入内された 10180906 方々にも 劣らないように、御所での晴れの儀式の  
 ていた。父の大納言はもう 10180709 亡くなっていたが、 母親の北の方は由緒ある家柄  
 亡くなっていたが、母親の 10180802 北の方は 由緒ある家柄の出の折目正しいひとであ  
 の心を配って、けっこう、 10181101 万事に そつなく取りまかっているけれども  
 たが、帝が御寵愛のあまり 10190604 無理にも 側に引きつけてお置きになりたいばかり  
 世の語り草にもなりそうな 10171407 目に立つ 御慈しみ方なのであった。／上達部や殿  
 することばかりであるが、 10180504 唯一つ、 帝の御愛情の世に類いないまで深く濃や  
 っていたが、母親の北の方は 10180803 由緒ある 家柄の出の折目正しいひとであった。現  
 取り沙汰して、玄宗皇帝が 10180308 楊貴妃の 色香に溺れて、国を傾けた例などまで引  
 ないまで深く濃やかなのを 10180604 頼みの綱として、 表面はこの上なくみやびやかに  
 なく心細そうにともすれば 10171206 里下りの度重なるのを、 帝はやるせないまでに不  
 える後宮の女人たちの間に 10180704 立ち交って 宮仕えの日々を送っていた。父の大納  
 した更衣として、他から 10190504 立てられるはずであったし、 自身もそれにふさわ  
 しいひとであった。現在、 10180809 両親 揃って、はなやかに世を張っている家から入  
 唯一つ、帝の御愛情の世に 10180602 類いないまで 深く濃やかなのを頼みの綱として、

て、<いにしへの人の>親 10260401 うち具し、さしあたりて花やかなる<世のおぼえ  
べききにはあらざりき。 10261409 おぼえ いとやむごとなく、じやうずめかしけれど  
生まれ給ひぬ。いつしかと 10260906 心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせてご覧するに  
疑ひなき儲けの君と、世に 10261110 — もてかしづき聞ゆれど、この御にほひには並び  
らざりければ、おほかたの 10261207 やむごとなき御思ひにて、この君をば、わたくし  
みにてまじらひ給ふ。父の 10260302 大納言はなくなりて、母北の方なむ、由あるにて  
む、世になく清らなる玉の 10260808 をのこ御子さへ 生まれ給ひぬ。いつしかと心もと  
御更衣あまた侍ひ給ひける 10250606 なかに、いとやむごとなききにはあらぬが、す  
たちは、まして安からず、 10251001 あさゆふの 宮仕へにつけても、人の心をも動か  
急ぎ参らせてご覧するに、 10261003 めづらかなる ちごの御かたちなり。一のみこは右  
たゞ、めざましきものに 10250806 おとしめ そねみ給ふ。同じほど、それより下臈の  
、じやうずめかしけれど、 10261504 — わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御  
はしたなきこと多かれど、 10251707 かたじけなき 御心ばへのたぐひなきを頼みにてま  
事かぎりなし。はじめより 10261404 おしなべての うへ宮づかへし給ふべききにはあら  
となききにはあらぬが、 10250703 すくれて時めき給ふ、ありけり。はじめよりわれ  
ご御子さへ生まれ給ひぬ。 10260903 — いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせ  
心ばそげに里がちなるを、 10251109 — あかずあはれるものに思ほして、<いよゝゝ  
ふべくもあらざりければ、 10261203 — おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君を  
かゝる事の起こりにこそ、 10251504 世も乱れ、あしかりけれ、と、あめのしたにも、  
てなしなり。かんだちめ、 10251306 うへ人なども、あいなく目をそばめつゝ、いとま  
めざましきものにおとしめ 10250901 そねみ給ふ。 同じほど、それより下臈の更衣たち  
ばゆき人の御おぼえなり。 10251408 もろこしにも、かゝる事の起こりにこそ、世も乱  
にて、寄せ重く、疑ひなき 10261106 儲けの 君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御  
きいてつべくなりゆくに、 10251702 いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御  
におとしめそねみ給ふ。 10250903 同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安  
ご御子さへ生まれ給ひぬ。 10260905 いつしかと 心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて  
花やかなる<世のおぼえ> 10260406 — 御かたゞ、にもいたう劣らず、なにごとの儀式  
はして、<いよゝゝ>人の 10251208 そしりをも えはゞからせ給はず、世のためしにも  
りや深かりけむ、世になく 10260806 清らなる 玉のをこの御子さへ生まれ給ひぬ。いつ  
ふべくもあらざりければ、 10261205 — おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君を  
へのたぐひなきを頼みにて 10260105 — まじらひ給ふ。父の大納言はなくなりて、母北  
つもりにやありけむ、いと 10251103 あつしく なりゆき、もの心ばそげに里がちなるを  
んだちめ、うへ人なども、 10251309 あいなく 目をそばめつゝ、いとまばゆき人の御お  
げに里がちなるを、あかず 10251202 あはれるものに 思ほして、<いよゝゝ>人のそ  
を頼みにてまじらひ給ふ。 10260301 父の 大納言はなくなりて、母北の方なむ、由ある  
の心をのみ動かし、恨みを 10251011 負ふ つもりによりやありけむ、いとあつくなりゆき  
きいてつべくなりゆくに、 10251703 いとはしたなき こと多かれど、かたじけなき御心  
しづき給ふ事かぎりなし。 10261401 — はじめよりおしなべてのうへ宮づかへし給ふべ  
父の大納言はなくなりて、 10260305 母 北の方なむ、由あるにて、<いにしへの人の>  
われはと思ひあがり給へる 10250804 御かたゞ、めざましきものにおとしめそねみ給  
花やかなる<世のおぼえ> 10260407 御かたゞ、にも いたう劣らず、なにごとの儀式を  
じらひ給ふ。父の大納言は 10260304 なくなりて、 母北の方なむ、由あるにて、<いに  
の大納言はなくなりて、母 10260306 北の方なむ、 由あるにて、<いにしへの人の>親  
らず、なにごとの儀式をも 10260512 — もてなし給ひけれど、とりたててはかゝ、しき  
、じやうずめかしけれど、 10261506 — わりなく、まつはさせ給ふあまりに、さるべき御あ  
世のためしにもなりぬべき 10251303 — 御もてなしなり。かんだちめ、うへ人なども、  
はしたなきこと多かれど、 10251706 — かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて  
くなりて、母北の方なむ、 10260307 由あるにて、 <いにしへの人の>親うち具し、さ  
もてなやみぐさになりて、 10251605 楊貴妃の ためしも、ひきいてつべくなりゆくに、  
き御心ばへのたぐひなきを 10260104 頼みにて まじらひ給ふ。父の大納言はなくなりて  
なりゆき、もの心ばそげに 10251108 里がちなるを、 あかずあはれるものに思ほして  
へのたぐひなきを頼みにて 10260112 まじらひ給ふ。 父の大納言はなくなりて、母北の  
にはあらざりき。おぼえ 10261501 いとやむごとなく、 じやうずめかしけれど、わり  
にて、<いにしへの人の> 10260313 親 うち具し、さしあたりて花やかなる<世のおぼ  
、かたじけなき御心ばへの 10260102 たぐひなきを 頼みにてまじらひ給ふ。父の大納言

分析が基礎をなしているようにみうけられるが、現代語の研究は、そうっていない。それぞれの理由があるにしても、現代語の研究にも、一作品の全面的記述の体のものがあってよいのではないかとおもわれる。文脈つき用語索引といったものは、その研究の道具となりうるものである。古代語作品の現代語訳という、いわば特異といってもよい一局面の、その現代語についての研究でも、伝統を継承するためにどのような表現体系がいま必要であるかを、おしえることになるであろう。

古代語作品の現代語訳にかかわる、古代語のがわの制約は、現代語に翻訳される古代語作品が、文芸におおきくかたよるであろう、すなわち古代語もその範囲に限定されるであろう、というものである。しかしながら、いわゆる古語辞典について、小松英雄(1985)がつぎのようにいっている。

「過去の日本語を対象とする辞書は、目的に応じて二つの類型に分けることができそうです。仮に名づければ一つは古代語辞典で、古い日本語の姿を示すために、漢文の訓読に用いられた語や古辞書の和訓などを豊富に収め、語源解釈にも力が入れられるものです。もう一つは古典用語辞典とよぶにふさわしいもので、古典文学作品の用語を収録し、その読解に役立つことを目的とするものです。現在の古語辞典の類のほとんどはその点についての性格づけがあいまいだといわざるをえません。」(p.3)

現代語＝古代語辞典も、当面の目標として、現代語＝古典用語辞典を設定することは、ありうることである。研究のありかたとしても、訓読語や記録語をしばらくおいて、文芸作品用語に目標をしばるということは、当然にありうることである。

さて、以上のように問題をかかえてはいるが、その古代語作品の現代語訳を利用した研究として、宮島達夫(1980)がある。現代語訳における動詞＋補助動詞の内容が、古典文芸作品においては、動詞＋ゼロ、ないし動詞＋助動詞で表現されている、ということに着目し、文法形式のとりあつかいに注意を喚起している。ただし、おなじ著者のものとして、むしろ宮島達夫(1979)のほうが、かえりみるべきであろう。『共産党宣言』の歴代の日本語訳をな

らべ、用語・文体など種々の観点から対照して、変遷をとらえるにおよんでいる。原文が他言語であるが、種々の翻訳を対照する点において、古代語作品の現代語訳を検討するうに、参考となるのである。鈴木泰(1988)は、明治初期というきわめて限定された期間の、一原典からの多種の翻訳を対照し、表現の多様性をしめしている。

なお、古代語作品の現代語への翻訳というような行為は、現代においてのみおこなわれているわけではない。ひとつの原典について、時代時代に当代語に翻訳されたものをつみかさねてゆくならば、それなりの表現の歴史がたどられることになるであろう。その原典は、古代語作品である必要はなく、いまふれた宮島あるいは鈴木のように、他言語作品であってもよい。漢文訓読の歴史は、日本語の歴史におおきな地位をしめているから、それをたどるならば、表現・意味の歴史にも寄与するものがあるとかんがえられる。ただし、訓点語研究の現段階では、たとえば月本雅幸(1987)の総括にしろるように、訓読の歴史は「訓法」の歴史としてとらえられているとみうけられ、また、漢文訓読が現在も文語でおこなわれていることに、端的にうかがうことができるように、訓読の表現の推移は、一般の表現の推移からおおきくはなれてきているのかもしれない。

つぎのようなものもある。いずれも、一方に、ラテン語・ポルトガル語・スペイン語原典から中世語に翻訳されたものがあり、他方に、やはり原典にもとづいて現代語に翻訳されたものがある。

- ・松岡 洸司・三橋 健(1979年) コンテムツス・ムンデ。勉誠社発行。
- 池谷 敏雄(1984年) キリストにならいて 改訂版。新教出版社発行。
- ・龜井 孝・H. チースリク・小島 幸枝(1983年) 日本イエズス会版  
キリシタン要理 —— その翻案および翻訳の実態 ——。岩波書店発行。
- ・大塚 光信(1986年) コリヤード 懺悔録。岩波書店発行、岩波文庫。
- ・小島 幸枝(1989年) キリシタン版『スピリツアル修行』の研究 ——  
「ロザイロの観念」対訳の国語学的研究 資料篇。笠間書院発行、笠

間叢書 214。

・鈴木 博(1985年) キリシタン版 ヒイデスの導師。清文堂発行。

近松 洋男(1990年) キリシタン版「ヒイデスの導師」の原典的研究。

思文閣出版発行。

複製・翻刻・翻字・翻訳は、ここにかかげたものばかりでないことはいうまでもなく、ひとつの作品についても、ほかの作品についても、さらにあげることができ、大要は福島邦道(1973)についてしられるであろう。その福島は、コンテムツス＝ムンヅについて、現代語での翻訳の別のひとつである大沢章・呉茂一(1960年)『キリストにならいて』(岩波書店発行、岩波文庫)とくらべ、「その訳し方は、キリシタンのも現在のもほとんど同じで、原文に忠実な訳である」(p.38)といている。しかも、現代語での翻訳が、中世語での翻訳の影響を受けていることは、おそらく、ない。現代語＝古代語の対照ないし表現史のために、キリシタン資料は、特別の有用性をそなえているといつてよい。

(\*)

漢文訓読を利用した表現・意味の歴史の研究がなりたつとするならば、漢文訓読を圧縮した古辞書あるいは音義を利用することによっても、研究がなりたつのではないであろうか。漢字字書においては、漢字が一応一定した意味をにないつづけているから、その字訓の時代的推移は、表現の歴史にほかならない。漢字が雅語や他言語にいれかわっても、事情はかわらないであろう。その予想のもとに、(1)節の「さわがしい」の記述は、古辞書の用例をしめしてある。

古代の漢字字書は、しかしながら、たとえば類聚名義抄が典型的にそうであるように、和訓の集成をむねとしていて、やはり、文脈をもつというにはなれている。字義も、字書に説明されているのではなく、その和訓を符牒として了解せらるべきものであるから、結局、当の和訓の意味するところは、直感的なところでしか理解しえない、あるいは、ほかの資料とあいおぎなつ

てしか理解しえない、ということになる。この制約は、もとより、漢字字書についてにかぎったことではなく、雅語・古言の辞書など、語と語との単純な対照を基調とする対訳辞書についても同様である。そのような辞書の和訓などは、また、先行する辞書から影響をこうむるのがつねであり、いつの時代のものであるのか、考証を必要とすることになる。

『日葡辞書』は、下学集・節用集などの影響をうけているかもしれないが、その影響のうけかたは、日本の辞書の相互のあいだのものとは質をことにしているであろう。また、日葡辞書は、いうまでもないことながら、ポルトガル語による意味の説明があり、かつ、使用例がそなわる。日本の古代の辞書がおおくもつ欠点は、克服されていると評価してよいとかがえられる。しかも、この辞書の解説部分に現代語訳があらわされたことは、中世日本語と現代日本語とを直接に対照することができる便宜があたえられたことを意味する。いま、土井忠生・森田武・長南実(1980年)『邦訳日葡辞書』(岩波書店発行)の解説部分からキーワードをぬきだし、そのキーワードから日葡辞書もとのみだしを検索することができるようにしよう。このキーワードは、いうまでもなく、現代日本語であり、もとのみだしは中世日本語である。邦訳日葡辞書の冒頭についてくだんの作業をおこない、キーワードを五十音順にならべたうえで、その一部をしめすならば、つぎのみひらきのようになるであろう。はじめのほうにある「あらう[洗]」についていうならば、邦訳日葡辞書で大略つぎのようであった部分を、みられるようにくみかえたのである。

《 》内は、現代日本語、すなわちもと中世ポルトガル語である。

浴び,ぶる,または,びる,びた 《体を洗う.》 例,湯,水を浴ぶる 《湯か水で身体を洗う.》(p.7)

中世近世の交にあらわれた、キリスト教関係の日本語辞書は、いずれも、表現史の研究のために、有用である。ただ、邦訳日葡辞書のような現代語訳がないために、他言語を媒介として古代語をさぐらなければならず、その点が厄介である。

古代の辞書を利用して、表現・意味の歴史の研究をすすめるときに、利点

あぶる[炙] ①あぶ・る[炙]「何か物を火に当てて——る＝火で物をあぶ・る」。

②(人を生きながら炙る。＊火炙りにする。)あぶりころ・す[炙殺]。

③(炙って乾かす。)あぶりから・す[炙涸]、あぶりかわか・す[炙乾]、あぶりかわらが・す[炙乾]、あぶりかわら・ぐる[炙乾]。

④(炙って焦がす、または、物を焦げるようなぐあいに炙る。)あぶりこが・す[炙焦]。

⑤(豆を材料として生チーズのように作ったものを切って、火で炙ったもの。)あぶりだうふ[炙豆腐]。

⑥(葉の大きな海藻の一種を炙ったもの。卑語。)あぶりこぶ[炙昆布]。

⑦(炙った魚。)あぶりいを[炙魚]。(優った言いかた。)やきいを[焼魚]。

⑧(炙った物。)あぶりもの[炙物]。

⑨(炙った米の餅。)あぶりもち[炙餅]。

あふれる[溢] (時に。)あば・く。

あぶれる[炙] あぶ・る[炙]。

あみ[網] ①(魚を捕る網を引く所。)あば[網場]。

②(餌網場[まきえば]のような場所で、鳥に網を打ちかけたり、鳥網を仕掛けておいたりする所。)あば[網場]。

あむ[編] (竹で編んだ道具で、茶その他の物を入れて煎るのに使う。)あぶりこ[炙籠]。

あらう[洗] (体を洗う。)あ・ぶる、または、あ・びる[浴]「湯が水で身体を——う＝湯、水をあ・ぶる」。

あらず[荒] (自由に出て来ては、そこらを荒らす。)あば・る[暴]「猪が野原や田畑に自由に出て来ては、そこらを——す＝猪[しし]があば・るる」。

ありあまる[有余] (時に。)あば・く。

あれはてる[荒果] (家が荒れ果てて自然に壊れる。余り用いられない。欠如動詞。)あば・るる[荒] → 崩れる。

いる[煎] (竹で編んだ道具で、茶その他の物を入れて煎るのに使う。)あぶりこ[炙籠]。

いる[炒] ①あぶ・る[炙]「ある薬とか茶とかなどを——る＝薬、または、茶をあぶ・る」。

②(油で揚げた、あるいは、油で炒りつけた物。)あぶらいい[油煎]。

うお[魚] (炙った魚。)あぶりいを[炙魚]。(優った言いかた。)やきいを[焼魚]。

かいがら[貝殻] (行灯の中に据えておく、油を入れた皿、貝殻、土器。)あぶらつき[油盡]。

かけまわる[駆回] (あちらこちらを駆け回りながら、隊列を乱して敵に襲いかかること。)あばらがけ[荒駆]。

がさつ (話しぶりなどが軽率でがさつな人。)あばけもの[者]。

かみ[紙] (油を塗った紙、または、それで作った厚紙で、雨よけや防水の用に使うもの。)あぶらがみ[油紙]。

かわかす[乾] (炙って乾かす。)あぶりから・す[炙涸]、あぶりかわか・す[炙乾]、あぶりかわらが・す[炙乾]、あぶりかわら・ぐる[炙乾]。

かんそうする[乾燥] (茶、薬、その他の物を火で乾燥する、すなわち、水気を除く。)あぶりはしやが・す[炙]。

きけん[危険] (危険である(もの)、あるいは、危険にさらされている(もの)。)あぶない[危]。あぶなさ[危]。あぶなう[危]。

くずれおちる[崩落] (家や壁などで、壊れて崩れ落ちた(もの)、あるいは隙間のできた(もの)。)あばら[荒] → 壊れる。

くずれおちる[崩落] (壊れて崩れ落ちた古家。)あばらや[荒屋]。

くずれる[崩] (家が荒れ果てて自然に壊れる。余り用いられない。欠如動詞。)あば・るる[荒]「家は風によって——れ、雨によって腐る＝家は風にあば・れ、雨に朽つる」。

くだ[管] (油を入れておく管、あるいは、竹筒。)あぶらづつ[油筒]。

くつつく[付] (体の汗や脂肪が着物などにくつつく。)あぶらづ・く[脂付]。

けいそつ[軽率] (話しぶりなどが軽率でがさつな人。)あばけもの[者]。

げきする[激] (しつけが悪く、態度が乱れていて、性格が激しやすいような者。)あばれたひと[暴人]。

あばれもの[暴者].

こえる[肥] (脂肪がつき、肥えてつやつやしている。)あぶらぎ・る[脂], または、あぶらき・る[脂] → 脂肪.

こがす[焦] (炙って焦がす。)あぶりこが・す[炙焦].

こきぶり あぶらむし[油虫].

こげる[焦] (物を焦げるようなぐあいに炙る。)あぶりこが・す[炙焦].

こわれる[壊] ①(家が荒れ果てて自然に壊れる。余り用いられない。欠如動詞。)あば・る[荒] → 崩れる.

②(家や壁などで、壊れて崩れ落ちた(もの)、あるいは、隙間のできた(もの)。)あばら[荒]「垣や壁が——れているので、いたる所から風が吹き込み、雨が降り込む＝垣、壁あばらにして 雨、風たまらぬ」。(副詞。)あばらに[荒].

③(壊れて崩れ落ちた古家。)あばらや[荒屋].

こんぶ[昆布]・ (葉の大きな海藻の一種を炙ったもの。卑語。)あぶりこぶ[炙昆布].

さしいれる[差入] (油を差し入れる。)あぶらをさ・す[油差], すなわち、あぶらをつ・ぐ[油注] → あぶら[油].

さら[皿] (行灯の中に据えておく、油を入れた皿、貝殻、土器。)あぶらつき[油盞].

さわぎ立て[騒立] (子供が跳ね回るときなどのように、騒騒しくてむちゃくちゃである。)あば・る[暴]「この子供がこんなに跳ね回って——てるのには、何とも手の下しようがない＝この童部[わらんべ]があば・れてたまらぬ」.

しつけ ①(しつけが悪く、素行がよくないなど、だらしない者。)あばれもの[暴者].

②(しつけが悪く、態度が乱れていて、性格が激しやすいような者。)あばれたひと[暴人], あばれもの[暴者].

しばう[脂肪] ①(動物性の脂肪、脂肪油、油脂、バター、ラード、など。)あぶら[脂] 「植物性の油のように、体から出る——や汗＝身のあぶら」→油.

②(脂肪がつき、肥えてつやつやしている。)あぶらぎ・る[脂], または、あぶらき・る[脂]「——がついて肥えている人＝あぶらぎ・った, または、あぶらき・った人」「——を含んだ湯や汁＝あぶらぎ・った湯、汁、など」.

③(体の汗や脂肪が着物などにくっつく。)あぶらづ・く[脂付].

④(着物についている、体の汗や脂肪による染み。)あぶらじみ[油染、脂染] → 染み.

しみ[染] (着物についている、体の汗や脂肪による染み。また、広く油による染み。)あぶらじみ[油染、脂染]「油による——ができる＝あぶらじみがする」「油や脂肪の——を取り去る＝あぶらじみを落とす」.

すきま[隙間] (家や壁などで、壊れて崩れ落ちた(もの)、あるいは隙間のできた(もの)。)あばら[荒] → 壊れる.

そうぞうしい[騒騒] (子供が跳ね回るときなどのように、騒騒しくてむちゃくちゃである。)あば・る[暴] → 騒ぎ立てる, しつけ, 走り回る, 荒らす.

そうだ (人の言ったことに、同意したり是認したりする時に、答える助辞。)ああ.

そこう[素行] (しつけが悪く、素行がよくないなど、だらしない者。)あばれもの[暴者].

たいど[態度] (しつけが悪く、態度が乱れていて、性格が激しやすいような者。)あばれたひと[暴人], あばれもの[暴者].

たけ[竹] (竹で編んだ道具で、茶その他の物を入れて煎るのに使う。)あぶりこ[炙籠].

たけづつ[竹筒] (油を入れておく管、あるいは、竹筒。)あぶらづつ[油筒].

だらし (しつけが悪く、素行がよくないなど、だらしない者。)あばれもの[暴者].

たる[樽] (油の樽。)あぶらだる[油樽].

つける[付] (油をつける。文書語。)あぶらぎ・す[油差].

つぼ[壺] ①(婦人が髪につける油を入れておく小さな壺。)あぶらつぼ[油壺].

②(油入れの壺、容器)あぶらつぼ[油壺].

つや[艶] (ある細工物の表面を充分に滑らかにして磨き上げてから、油で艶を出すこと。)……



となるのは、多量の語にかかわる表現がえられることである。たとえば、源氏物語原典全巻のとなり語数は約2万、それに対して、日葡辞書の項目数は約3万である。現代語訳を整理してえられる現代語の語数も、おなじようなものであろう。辞書によってのみしられる、古代語の語は、少数ではないはずであって、前田富祺(1985)には、つぎのようにいっているところがある。「蝙蝠の語史を考える場合には、カハホリが扇の意味で使われたこともあって、文学作品にも比較的例が多く、また、カハホリとコーモリというように同じカ行で始まっていることもあり、変化を考えやすかった。しかし、頭垢をどう呼ぶかということになると、辞書以外の例は見つけにくいのである。」(p.368)

辞書による研究としては、明治時代の英和辞書諸種を資料の中心において、翻訳日本語の交替をおった、総郷正明(1976)、永島大典(1982)、飛田良文(未刊)などがある。永島は、(2)節にあげたような前田富祺の研究方法に、もっとも親近感をもつとのことである。

(\*)

古代語研究を集約的にしめすものとして、古代語辞典は期待されるところがあるであろう。(1)節のはじめにしるした「さわがしい」の項目は、古語辞典および国語辞典いくつかに適当にあたってつくったものである。特につぎのふたつは、古代語の用例すべてに現代語訳が付してあり、(1)節で現代語文脈をしめしたものは、その現代語訳を引用しているのである。

北原 保雄(1987年) 全訳古語例解辞典。小学館発行。

桜井 満・宮腰 賢(1990年) 旺文社全訳古語辞典。旺文社発行。

翻訳が重要であることは、うえに萩谷『枕草子』の主張を紹介したところであるが、ここの北原『全訳古語例解辞典』も、序文につぎのようにいっている。

「古語辞典の用例文は、その項目の語が実際にはどのように用いられているかを示すために載せられるのです。しかし、用例文と出典名だけを示すやり

方では、どの作品のどういうところに用いられているかということは分かりませんが、肝心の意味がよく分かりません。辞典の用例文は短いものですから、古典を読みながらいる人でも、その意味をよく理解することができない場合が多いのです。

「現代語訳をつけるということから、思わぬ副次的成果が出てきました。全訳してみると、どうもうまく語釈に合わないという用例文が少なくないのです。辞典を作っている人にうまく訳せない用例文の意味が、どうしてそれを引く人によく理解してもらえるでしょうか。そういう不適切な用例文を除去することができました。」

この発言は、現行の古語辞典一般の信頼性に、疑問をもたせるものであり、佐伯梅友・森野宗明・小松英雄(1985年)『例解古語辞典 第二版』(三省堂発行)にも同様の発言があるが、いま、そのことにはたちいらないでおきたい。

古語辞典にも限界のあることは、いうまでもない。(1)節の「さわがしい」の記述に、「うるさい」がみえないのは、現行の古語辞典ないし国語辞典に、適当な記述をみいだしていないということである。

(2)節にひいた東条『分類方言辞典』・尚学図書『日本方言大辞典』・上村・島袋『沖縄語辞典』は、解説部分の検索を実行したものである。他言語＝日本語辞典にも、日本語の索引をつけたものがあり、たとえばつぎであって、その日本語の排列はともに五十音順によっている。

愛知大学中日大辞典編纂処(1968年) 中日大辞典。刊行会発行、大安発売。1986年増訂版以降は大修館書店発行・発売。

菅野 裕臣ほか(1988年) コスモス朝和辞典。白水社発行。

中野洋(1989)は、英和辞典の解説部分の日本語を検索し、そこにあらわれる表現が、和英辞典に掲載されている表現より、はるかに多様であり有用であることがあると、指摘している。その指摘のようなことが、古語辞典にもあるならば、その解説部分の検索は、表現・意味の歴史の研究のために、有用である。中野は、英和辞典のなかの日本語の検索を、コンピュータをもちいておこなっている。コンピュータをもちいてはじめておこなうことのできる

作業であるが、いまや、国語辞典も、辞典そのものがコンピュータ用にも作成され、検索ソフトウェアも提供されて、解説部分を利用する作業が容易になっている。新村出『広辞苑』（岩波書店発行）の利用については、佐々木功昌(1991)および増井元(1991)の紹介がある。ただし、(1)節の「さわがしい」の記述では、その『広辞苑』を利用するにいたっていない。

#### (4) 現代語＝古代語辞典編集上の問題

以上、現代語＝古代語辞典を編集するに際し、準備作業としてどのようなことがありうるかを、かんがえた。いわゆる古語辞典の、うらがえしといった体のものを、作成しようというのであり、準備といっても、古語辞典の編集とさしてかわらなかったかもしれない。ここでは、準備作業というよりは、編集方針とでもいうべきことがらについて、一二ふれておくこととしたい。そのようなことで、すでにふれたこととしては、(3)節に、古代語が文芸作品用語にかたむくことも是とする、としたことがある。

辞典の内容にかかわることがらとしては、表現・意味の歴史の研究とどのような関係におくか、ということがある。(1)節に、研究の成果を集約するものとして辞典を作成するといい、(2)(3)節でも、辞典作成と研究とを対立させるようなことはしなかったから、唐突な問題提起であるとおもわれもするであろう。たしかに、辞典作成は、研究を基盤とするものでなければならない。しかしながら、実は、研究はいつ終了するとしりえないものであり、それに対して、辞典の作成においては、編集を構想したときに、すでに完成をみこんでいるものである。研究がふかさを理念とするならば、辞典はひろさを理想とし、両者は別の方向をめざして、なかなか妥協しがたいようにもおもわれる。そこで、前田富祺(1980 a)は、辞典のひろさを評価して、つぎのようにいっている。

「一般的に辞書を評価するとすれば、部分部分に非常に優れたところがあるというよりは、不十分な部分でもある程度の水準を保っている、平均的に間違いが少ないことを高く評価すべきであろう。その点では、辞書に最上を求

めるべきではない、辞書の良さというのは最大公約数的なものであるということもできよう。」(p.8)

辞典のひろさから、研究がうながされることもあるであろう。研究に完全には依存することなく、辞典は、独自に構想されうるのである。その構想を実現するためには、辞典自体のがわでそれなりに準備を必要とする道理である。研究を総括することも、おこなわなければならないひとつであり、辞典のがわからの研究への関係は、そこでつよいというべきである。

現代語＝古代語辞典の形式にかかわる問題としては、現代語をどのように設定し、排列するか、ということがある。すなわち、みだしの問題である。(2)節にふれたように、現代語＝古代語辞典は、類義語辞典の一種であるともかんがえられる。すると、類義語辞典がそうであるように、まず、類義の関係にあるものとして、どのような語の群を設定するか、解決しなければならない。みだしは、類義語のあつまり、ないしそれを代表するものとなる。そうして、つぎに、その類義語の群をどのように排列するか、解決しなければならない。排列の方法はふたつあって、すなわち、ひとつには、意味によって、たとえば林大(1964)『分類語彙表』に準じて、排列することになり、このばあい、全語の五十音順索引が必要となるであろう。いまひとつには、群の代表の音によって、たとえば五十音順に、排列することになり、このばあい、代表とならなかった語には、からみだしをあたえ、また、反義のような関係にある群とのあいだに、相互参照を可能とするような手段を講ずることが、必要となるであろう。

このみだしの排列の問題は、(2)節にあげた、東条『分類方言辞典』・尚学図書『日本方言大辞典索引』・上村・島袋『沖縄語辞典』のいずれにおいても、認識されていた。解決はそれぞれにことなるが、いま上村・島袋『沖縄語辞典』の関係部分を引用する。

「辞典(本文篇)の利用価値を大きくするために、標準語引きによる索引(索引篇)を作成した。索引は五十音順による小項目式にした。大項目式や意味分類式では、索引にまた索引をつける必要があり、また本文の原稿からそれを作

るのには困難が伴ったからである。」(「編集経過の概要」 pp.5-6)

「この索引は本文篇の利用を便利にするために作成したものであって、標準語引き首里方言辞典ではない。すなわち、この索引篇の見出し語の標準語は、そこにあがっている首里方言と、意味や用法の上で完全に同じというわけではない。……。したがって、この索引篇は、本文篇にでている首里方言を標準語から見いだすために使ってほしい。本文篇に採録されていない首里方言はこの索引にはもちろんない。

「見出し語(標準語)は現代かなづかいに従って平仮名で書き、それを五十音順に配列してある。

「この索引は、本文篇の見出し語に付けた標準語訳をもとにして作っており、小項目主義である。また、意味による分類をしていないので、同義語、類義語、反義語や、上位概念と下位概念を表わす語などを、一箇所にとまとめることは原則としてしなかった。したがってこれらの単語は別々の箇所に別の見出し語として出ている。……。そこでこの索引を利用する場合、一つの見出し語に当たることでとどまらずに、その標準語と同義または類義の見出し語にもなるべく当たるようにして欲しい。ただし、このような不便をできるだけ少なくするために、……参照すべき見出し語(標準語)を示すように努めた。

「標準語からでは検索しにくいような首里方言については次のように扱った。すなわち、沖縄固有の事物を表わす首里方言の単語で、それに当たる標準語がないもの、あるいはあっても、あまり知られていないようなものは、適当な見出し語のところにまとめてある。

「この索引は標準語と意味的に対応する首里方言の索引であるから、音韻的に対応関係にある語でも意味が相違していれば、この索引からは捜すことができない。」(以上、「索引篇使用上の注意」 pp.611-614)

(1)節の「さわがしい」の記述で、そのみだしに「さわがしい」とあるのは、代表の語である。その直後に「うるさい、やかましい」とあるのは、現代語での類義表現であり、排列をどのようにするにせよ、類義表現をしめしておく必要はある。そうした類義表現についても、この代表のもとにあるという

ことを、索引によってにせよ、からみだしにせよ、しらせなければならない。ここでの記述は、排列の問題にはかかわっていない。

このほかにも、編集上で解決しなければならない問題は多々ある。たとえば、古代にはなかった概念をどのように処理し、あるいは逆に古代にしかなかった概念をどのように処理するか。そのようなものを顧慮しないのも、方針ではあるが、古代語の表現を可能性としてさがし、現代語の表現をさぐるのも、方針であって、(1)節にしめした、現代語の外来語表現と枕草子の古代語表現との対照は、その方針によるものである。また、古代語と、出現作品と、その時代とを、どのように排列するか。時代を設定しない方式もありえ、(1)節の「さわがしい」の記述は、かんがえられるひとつにすぎない。また、現代語を実例中にどのようにいれ、古代語の実例をどこまでしめすか。また、古代語の初出をおもんずるか、あるいは使用状況をおもんじて衰退までをしるすか。また、古代語の活用語の代表形をどのように設定するか。また、いくつかの古語辞典でところみられているような、研究の成果を注釈することを、おこなうか。などなど。しかし、それらにたちいることは、いまはひかえることとする。

どのような問題が生じようとも、その解決をあきらめることは、さげなければならない。われわれは、ただ、和英辞典の水準のみを、おもいえがいていならば、十分である。その編集には、やはり、日本語と英語とのあいだによこたわるみぞという困難が、たちはだかっていたであろう。しかしながら、国語学者にとってはまことに残念なことに、増田綱(1974年)『研究社新和英大辞典 第四版』(研究社発行)は、現代日本語の意味分析において、国語辞典をしのぐことになったのである。

(\*)

国立国語研究所がおこなう特別研究の候補のひとつとして、現代語＝古代語辞典を作成するための研究が立案された。しかしながら、大蔵省に予算を要求するまえ、研究所の要求わくのなかで候補を取捨する段階で、その案は

おろされた。したがって、研究所内の議論としては案があったことになるが、研究所のその公的な記録としては、研究所はそのような計画を立案したことがないことになるはずである。もとより、国立国語研究所は、現代語日本語を学術的に調査研究することを目的とする機関であり、そこにおいて、表現・意味の歴史を研究することに、どのような意義があるか、是非はとわれて当然である。この研究ないし辞典作成の計画が、研究所でふたたびとりあげられることは、おそくないであろう。

さいわい、立案の学術的背景について、研究報告集に投稿することがゆるされた。すなわち本稿である。研究報告集の内容が、なまえのとおり、研究成果の報告でなければならないところに、研究計画である本稿がはいっているのは、異様であるが、国立国語研究所の従来の研究とは相当にへだたった計画にも、それなりの準備的検討があったということで、了承をこうものである。また、本文中にふれた先行研究に、研究所のものがすくなくないことは、むしろ、本稿の発想が、研究所の研究からへだたっているようで、実はさしてはなれていないことを、ものがたっているであろう。

なお、この計画の着想は、立案者の私的な研究対象からでたものであり、現代語＝古代語辞典があるならばつかいたいという、使用者がわのたちばにあって、それは現在もかわったわけではない。辞典がないので、やむをえず作成者がわにたつことになり、かつて文部省科学研究費補助金に応募したこともあるが、それもおちた。計画立案における力量不足を感じさせられている。

#### (付)現代語＝古代語辞典略解題

現代語＝古代語辞典およびその先蹤のうち、みることのできたものについて、簡略に解題する。現代語＝古代語辞典としての観点からとらえるので、現在も刊行されているものも、とりあげる。発行ないし成立の年代の順序で排列するが、書簡の文章の関係は、あとにまわすこととする。また、のべかたのつごうで、本文と重複するところもある。あらかじめ目録をしめしておくならば、つぎようになる。

富士谷御杖『詞葉新雅』

1792 寛政 4 年板

東条 義門『類聚雅俗言』

1814 文化 11 年板

羽山 和卿『和歌俳諧 歌語粹金 後編』	1883 明治 16 年発行
付『普通教育 和文初学』	1891 明治 24 年発行
服部 元彦『雅俗俗雅 日本小辞典』	1890 明治 23 年発行
弾 琴緒『俗語雅調』	1891 明治 24 年発行
小田 清雄『雅俗対訳 国語のしるべ』	1891 明治 24 年発行
佐々木弘綱『詠歌辞典』	1897 明治 30 年発行
松平円次郎・山崎 弓束・堀籠 美善『俗語辞海』	1909 明治 42 年発行
志田 義秀・佐伯 常麿『日本類語大辞典』	1909 明治 42 年発行
田沢 景忠『懷中用稲廼門 俗語辞典』	1912 明治 45 年ころまでに発行
横山 青娥『詩歌作文 類語辞典』	1929 昭和 4 年発行
広田栄太郎・鈴木 棠三『類語辞典』	1955 昭和 30 年発行
藤井 高尚『消息文例』	1802 享和 2 年板
付『消息文典』	1893 明治 26 年発行
黒沢 翁満『雅言用文章』	1849 嘉永 2 年成
付『消息案文 後編』	1850 嘉永 3 年成
小田 清雄『普通対語 和文消息全書』	1891 明治 24 年発行
三田村楓蔭『言文対照 書簡文三ヶ月速成』	1907 明治 40 年発行

#### 富士谷御杖『詞葉新雅』

国立国語研究所に 2 種あって(ともに W 57-2 F 67), 1 種はカナモジ会から寄贈されたものであり, そちらのほうがすりがよい。以下の記述はそれらによる。

1792 寛政 4 年板。157 mm×107 mm, 1 冊。構成は, おほむね 3 丁, 本文 106 丁。凡例につきのようにある。

「さきにわか父わか兄。此国のことはをあきらめて。くはしくときおけるふみとも多く。世にもさやうの書数しらすあれと。哥よみしらぬ人の。里言より古言をもとめむに。とみの便とせむとて。聞おけるかきり。里言を上とし。古言を下にあてゝ冊子とす

「いまた歌よみしらぬ人も。此書にむかはゝ。おのつから詞にたやすきをしりて。やかて此道に志をおこすへし

「事にあたり時にのそみて。つねにいふ詞の。いにしへはいかにかいひけむとしりかたき時は。やかて此書を取り出で。里言の上のもしにつきて。其部をもとむへし

「古言里言の別は。かんたと片仮名をもてしらす

「今いろはの哥をもて部類したるは。古きにいたらむに。ちかきよりみちひかむとてなり

「詞は。万葉集。古今。後撰。拾遺をもとゝし。後々の集の詞をも。おもひえたるまゝをつたへられ。猶三十六人集。六帖その外物かたりは。土左日記。うつほ。源氏枕草子。かけろふ。さころも。さらしななどにとれり。又古事記。日本紀。古語拾遺。遊仙窟等をもてこれを補へり。

「古言の点つきたるは。歌によみつけぬ詞也。たゝこれ古き例をしるさせたる也。

「古言一言を。こゝかしこに出し。里言ひとつに。古言をふたつみつもあてたるは。軽重なとはありなから。義のかよへは也」



本文はつぎのようである。「(点)」としたのは、歌にもちいないことをしめすという庵点である。[ ]内は傍注。

サイシキエ[彩色画] (点)つくりゑ 源須  
サカ[逆]ニクル ねぢけたる ねちけがましき  
サワガシイ (点)らうがはしき  
サキタ、セル (点)うしなふ 人ヲ我ヨリ先ニ死セシメシ也  
サリナガラ (点)しかはあれど (点)さはあれど  
サイチウ 時と

(78 丁表)

「源須」は、源氏物語須磨を出典とすることをしめしている。

翻刻として、三宅清(1940 c)『富士谷御杖集第 5 巻』『詞葉新雅』、斎藤義七郎(1983)『イロハ順を五十音順に配列がえの 作歌用、里言・雅言対照辞書「詞葉新雅」』がある。斎藤のものは、俗語見出しを五十音順におきかえたものであるが、いわゆる公刊はされていないで、原稿の複写が、著者から国立国語研究所等に寄贈されているのである。福島邦道(1969)「雅俗語対訳辞書の発達」に、三ヶ尻浩の翻刻があると紹介されている。また、山田忠雄(1981)『近代国語辞書の歩み』(p.501)は、明治期のものとしてしたにふれる小田清雄『雅俗対訳国語のしるべ』の下巻「俗語の雅訳」が、この書の単なる活字化であり、羽山尚徳『普通教育和文初学』の巻之下「雅俗訳語」が、抜粋であると、指摘している。羽山尚徳『和歌俳諧歌語粹金』も、この書の抄出をしていて、ただし、おなじ著者でありながら、ふたつの抄出内容はことなっている。

この書についての研究は、三宅清(1940 b)、佐藤茂(1956 a)、建部一男(1964)、(1979)、中村幸彦(1964)が、古典的なものとしてある。佐藤は、あゆひ抄・かざし抄などをからめて、一連の佐藤茂(1956 b)、(1957 a)、(1957 b)の論考をおおやけにし、多面的な問題がかえられることを指摘している。うえの斎藤の翻刻も、この佐藤の研究に刺激されているようである。その斎藤の翻刻には序文があり、それもひとつの研究である。

なお、書名は、ひろく「しようしんが」とよばれてきているが、福島邦道(1984)は「ことばのしんが」としている。かつて、赤堀又次郎(1902)、佐村八郎(1904)がそのようにしていた。

東条 義門『類聚雅俗言』

影印が三木幸信(1968)『義門研究資料集下巻』(pp.2543-2707)にある。以下の記述はそれによる。

1814 文化 11 年板。1 冊。構成は、凡例等 5 丁、本文 47+26 丁。本文の前半は俗語＝雅語の対照、後半は雅語の索引となっている。凡例につぎのようにある。「ゝ・ゝ」はくの字点である。

「かたかなして、かみにあげたるは、さとびごと、ひらがなして、その下に出せるは、そのかたかなしてあげたる俗言にあたりぬべき雅ごと也、

「つねにおほくつかひて、しれやすきは、唯詞を出せるのみなり、少しふるき例の、いかゞともおほはるべきは、源紅葉うつ蔵竹など、注したるもあり、又よろしきほどの人さへ、おほくあやまれりと、おぼしきあれば、ついでに、そのよし、ことわれるもあり、

「俗語にいふは、ただ、ひとことにて、つねに、もちふるさまの、様々なるあり、そは其さまゝによりて雅言をあつ……、まれゝに、其けぢめをば、いさゝかづつ、いへるもあれど唯その、かたはゝをいへるのみなれば、必しも、それになづむ事なかれ、」

本文の俗語＝雅語の対照はつぎのようであり、[ ]内は細注である。

ザワツイタ ひたゝけなる

ザット 大かたに

ザンネン くちをし[タゞ物ヲ惜ム意ヲ口をしト云ト心得タル人アリヒガコトナリ]

ザワゝゝ さわがし又さわがしう又かしかましう又かまびすしう[ナド云ベシザワゝゝト云心ノ処ニさうゝ敷トカクハ非ガコトナリ]

ザシキサキ せんざい

ザトラ めしひ

ザンソヲスル よこす

ザル[竹器] いざる

ザワツク そよぐ又そよめく

(俗語＝雅語 37 丁表)

三木『義門研究資料集成下巻』は、この影印の解題(p.2544)に、「『詞葉新雅』一卷は、富士谷成寿の口授筆記といはれるが、義門が『類聚雅俗言』を編纂するにあたり、これを参考にしたのではないかと思はれるほど体裁が酷似してゐる」といつていて、まことにそのとおりである。雅語の索引を付したのが独創であり、雅語に接したときの便をはかったということのようである。

翻刻は、うえの詞葉新雅とあわせて、三ヶ尻浩の翻刻があると、福島「雅俗語対訳辞書の発達」に紹介されている。研究は、三木幸信(1955)がある。

羽山 和卿(編)、黒川 真頼(閲)『和歌俳諧 歌語粹金』

国立国会図書館にある(特38 757)。以下の記述はそれによる。国立国語研究所にも、後編がある(W 57- 2 KA 16 1, 2)。

初編 1881 明治 14 年、後編 1883 明治 16 年、三編 1886 明治 19 年、ともに東京府、同盟舎発兌。3 編、153 mm×105 mm、6 冊。第三編は、羽山和卿訂正、青木九江補纂、故人早川広海原纂となっている。歌書であり、構成はつぎのようである。

(初編)(上)はしがき 1 丁、凡例 1 丁、本文(総論、題、実字、などについて)56 丁、

付録(ことばの紐緒) 4 丁。

(下)目次 1 丁、本文(言葉よせ)59 丁。

(後編)(上)本文(歌語についての総説、各説)35 丁。

(下)本文(歌かたりのはし、雅言と俗語の事、歌中に読み入るべき名所の事、懷紙短冊詠草のかき様)35 丁。

(三編)(上)はしがき 2 丁、目録・引用書名略記 4 丁、本文(天の部に用ふべきことば、地の部に用ふべきことば、など)40 丁。

(下)本文(旅の部に用ふべきことば、生類部に用ふべきことば、ことばのしなくさぎ、など)27 丁。

この後編下巻の雅語と俗語の事が、俗語雅訳であって、1 冊の 3 分の 1、5 丁表から 16 丁

裏までを、しめている。つぎのような凡例がある。

「雅言[みやびことば]と俗語[さとびことば]と異なる事は皆人の知るところにあなれど。初学[うひまなび]のうちはそのけぢめをさへ辨へて。まゝ物わらひとなることのあれば。其しをりにもといさゝか左にかい集るになん。餘はもはら斯る事のみをしるせる文もあり。また先覚に就ても問ふて知りね」

実は、詞葉新雅の抄出である。ただし、表記は俗語・雅語ともにひらがなであり、排列も、みだしの第一字について、五十音順である。詞葉新雅にあった、和歌に用いないという庵点や、そのほかの注記も、はぶいている。

この編者には、つぎの著もある。なお、編者は、号和卿、本名尚徳である。

羽山 尚徳(編述)『普通教育 和文初学』

国立国会図書館にある(特 33 130)。以下の記述はそれによる。

1891 明治 24 年、大阪府、松村九兵衛・森本専助発行。179 mm×121 mm, 3 冊。構成はつぎのようである。

(上)題歌(冷泉為紀) 1 丁, 序(黒川真頼) 2 丁, 例言(鈴木要彦) 5 丁,

本文(文章といふ事の大意, 文に上世中世近世の差別ある事, 仮名遣ひの事, てにをはの事, 詞に八種の差別ある事, など) 63 丁,

頭欄(仮名遣ひのしるべ, 字音仮字格抄, など)がある。

(中)本文(時令門, 天門, 地理門, など。作例つき) 56 丁,

頭欄(冠辞, つづく辞から冠辞をもとめるもの)がある。

(下)本文(論説, 序跋, 記事, など。作例つき) 53 丁,

頭欄(雅俗訳語, 雅語俗解)がある。

この下巻頭欄の雅俗訳語は、28 丁表まであって、その本体の前後に、つぎのような凡例がみえる。

「これは俗語を雅語に訳せるなり亦いろはを以て分つ但し片仮字は俗語なり」

「日用の俗語数へ尽すべくもなし。以上は初学のために其一例を示すに過ぎず。尚委しきことは。其事を旨と記しゝ書を開きて見ね」

山田『近代国語辞書の歩み』(p.501)は、くだんの雅俗訳語が、詞葉新雅の抄出であることをみぬいている。しかし、抄出項目が歌語粹金とことなり、表記も、こちらでは詞葉新雅をおそって、俗語がかたかな、雅語がひらがな、排列も伊呂波順である。詞葉新雅における注記は、ない。

さて、ふたつの書から凡例をひいたが、しかし、「餘はもはら斯る事のみをしるせる文もあり。また先覚に就ても問ふて知りね」といい、「其事を旨と記しゝ書」というのが、どのようなものをさしているのか、いまのところ、することができないでいる。なお、歌語粹金でも和文初学でも、詞葉新雅から抄出したと、みずからことわることは、していないようである。

服部 元彦(纂)『雅俗雅 日本小辞典』

国立国語研究所にあり(413.16 Ha 44), また国立国会図書館にある(71 51)。以下の記述はそれらによる。

1890 明治 23 年，東京市，国語伝習所発行。126 mm×91 mm，1 冊。構成はつぎのようである。

凡例 4 頁，文法階梯 44 頁，仮字格階梯 18 頁，字音仮字格階梯等 18 頁，  
雅俗日本小辞典 238 頁，  
俗雅日本小辞典 184 頁。

凡例に，俗雅の部について，つぎのようなことをしている。

「俗雅の部は初学者をして少し高尚なる国文又は和歌を綴らんとする時其の思想を現すべき国語と其れを装飾すべき枕詞とを引出さしめんがために其れらを集め掲げたる也

「俗語にて引出すべき国語は其の見出しに掲げたる俗語の極めて大体の意味に当るものを挙げたり故にこれを使用せんとする時には文法によりて其活と時刻と自然或は使然等の区別を明にせずは有るべからず

「俗雅の部の如き辞書は今まで其の類無き事なれば其の見出しの俗語の並べかた又其の挙げかたなども自ら不充分なりと思ふところ甚多し此もつぎ、ゝに考をめぐらして漸く完全なるものにせんと欲するなり」

雅俗の部も俗雅の部も，雅語はひらがな表記，俗語はカタカナ表記であり，みだしの五十音順に排列してある。俗雅の部の本文の例。

サメル	あす。
サラ、ゝスル	さゐ、ゝし。
猿	ましら。
〔騒ぎ競ふ〕	あぢむらの。
騒グ	さうどく・そそめく・そよめく・とよむ・ののしる・ひたたく・ふためく。
ザワ、ゝスル	ささめく・そよぐ・そよめく。
〔さゐ、ゝ〕	たまぎぬの。

(pp.66-67)

ここの〔 〕内は，古代語であり，そのもとにあがっているのは，その古代語をみちびく枕詞である。

山田『近代国語辞書の歩み』(pp.498-499)は，この俗雅の部について，「雅俗の部から機械的操作を以て此の部を作製した臭いがする」としている。

1892 明治 25 年増補再版もある。国立国会図書館にある(71 51 イ)。1 冊。本体は雅俗辞典 381 頁，俗雅辞典 256 頁である。くみかたのちがいで，ページ数のみかけほどには，項目数はふえていないようである。凡例などにも修訂がある。

弾 琴緒(輯)『俗語雅調』

国立国会図書館にある(特 41 587)。以下の記述はそれによる。

1891 明治 24 年，大阪市，桐園出版掛発行。156 mm×111 mm，1 冊。琴緒は雅号，別号に桐園ともいい，発行所は著者のものとみなされる。なお，本名は舜平である。凡例に，つぎのようにある。

「歌よみ文章かゝむには。雅語と俗語との差別をよく辨ふべきなり。そははやく鈴木ぬしの雅語訳解。また萩原ぬしの古言訳解。など世につたはりて。上古の書どもをみる時には。い

とたよりなきものなれど。そは雅語をもひとわたりこゝろえたらむ人たちのうちみるには。ことたるべけれど。初学のともがらはさとりがてなるふしもあめれば。此書は俗語を雅語にいひとゝのへらるべくものしたるなり。月花のむしろ。歌のまとみなどにまじりて。うたよみ文章かゝむに。たまゝおもひよるふしありて。いひいでむとすれど。俗語のまゝにはいひとゝのへがたければ。いろにいひたらばよからむ。とおもふをりにひきいでむに。いさゝかたよりともなるべければとて。かくはものしつ」

構成は、序文(中村良顕)1丁、凡例3丁、本文52丁である。本文はつぎのようである。みだしの排列は伊呂波順、[ ]内は細注形式である。

○ザハツク[そよぎ。そよぐ。そよめく] ○サヘヅル[さへづり。なき。なく。トモ  
囀ノ意] ○サリナガラ[さすが。しかすがに。さりとて。シカハアレド。シカシナガラ。  
サハイヘド。サハアレド。乍然ノ意] ○サルヒト[かの人。アル人] ○サル所  
ヘユク[モノヘマカル。モノヘユク] ○サワグ[さわぎ。あわて。あわつ。あわつる。  
トモ 騒ノ意] (38丁裏)

ここの細注のカタカナおよび「トモ」については、凡例につぎのようにある。

「雅語には歌によむべきと。文章にかくべきと。さしてわかちはあらねど。そのうち文章には音便。また字音などをも用ひたれば。かゝるたぐひは。皆片仮字もてしるしつ

「俗語と雅語と意のおなじきは。雅語をあてたる終に云々トモと記せり」

ところで、凡例のうちに、つぎの一条がある。

「俗語はいとあまたあれは。これにもれたるは。拾遺にものすべし」

これに呼応して、巻末の近刻出版書広告に、つぎのようにある。

「弾 琴緒編輯 定価三拾五銭ナレドモ予約員ニハ左ノ正価ヲ以テ送本ス

○俗 語 雅 調 拾 遺 [上半紙摺和本綴一冊 正価郵税トモ金廿七銭]

○予約期限ハ廿四年七月三十日限同日以後ハ定価ニ復ス

此書は前輯に泄れたるもの猶多ければ古書より調へ出して歌文に要あるものを拾録し且巻末には「テニヲハ」の結辞けり。ける。けれ。なり。なる。なれ。らん。らめ。などの詞の遣ひさまを俗語に訳して初学の人にわかりやすくす因て前集購求の諸君は必ず合せて常に左右におくへき要書なり

○漢 語 雅 調 [上半紙摺和本綴一冊 正価郵税トモ金廿七銭]

此書は常に云ひなれたる漢語を雅語に訳したるなり諸学校生徒は是迄漢語まじりの文をのみ綴らしめたるに近来和文をも作らしむる事となりたれば漢語を和文に訳する近道なり尤歌学上にも必要の書なれば合せて購求あらんことを」

別に既刻出版書広告もあるから、この近刻出版書広告の「近」は、将来を意味しているであろう。この俗語雅調拾遺および漢語雅調については、しかし管見はおよんでいない。漢語雅調の広告には、編者のこころざしというものををすることができるであろう。

小田 清雄(輯)『雅俗対訳 国語のしるべ 一名読書作文自在』

国立国会図書館にある(特33 948)。以下の記述はそれによる。

1891 明治 24 年、大阪市、国文館発兌・森本専助発行。183 mm×128 mm, 2 冊。凡例につぎのようにある。わたくしに句読点をほどこす。

「此書、古言雅語の俗訳は古言訳解[萩原広道嘉永元年輯]・雅語訳解[鈴木朗文化元年中輯]・同拾遺[村上忠順安政五年輯]を集めて大成[モノ]しつ。俗語の雅訳は、詞葉新雅[北辺成寿寛政四年論定]のすて[むくいをむくひ、たましひをたましひなど、誤りたるが三つ四つあるは正しつ]、……。此書どもは、国文読むにも、作[カキ]習ふにも、甚有益なる書どもなり。」

俗語の雅訳は、その部分のみの凡例をももつ。そこには、つぎのようにある。

「此は詞葉新雅をさながら出だし、補遺は歌格類選[半井忠見輯]を採りて物しつる也。」

つぎのような構成をとっている。

(上)題辭(津守国敏)4頁、はしがき(小杉楹邨)5頁、凡例8頁、

・ 雅語の俗訳166頁、

頭欄(雅語用言各語に活用語尾をしめす)がある。

(下)俗語の雅訳 凡例2頁、本文138頁、

頭欄(本居宣長『漢字三音考』のうちの「音便の事」および市岡猛彦『雅言仮字格』『雅言仮字格拾遺』の翻刻)がある、

頭欄つづき24頁。

俗語の雅訳の補遺部分には、例歌を出典とともに注する。つぎのようである。

○イツノマニヤラ[○いつしか 金葉集 いつしかとあけゆくそらのかすめるは]

○イツトウ[○なへて 古今集 むさし野はなへて草葉のいろかはりけり]

みだしの排列は、みだし第一字について、雅語の俗訳では五十音順、俗語の雅訳では伊呂波順である。

編者は、先行する雅語＝俗語辞書を集成して、この書をあんだ。しかも、同時に、雅文＝俗文消息書を集成して、『普通対語 和文消息全書』をあんでいる。それは別にかかげる。

佐々木弘綱(編)、佐々木信綱(補)『詠歌辞典』  
国立国会図書館にある(71 106)。以下の記述はそれらによる。

1897 明治30年、東京市、博文館発行。105 mm×75 mm, 1冊。構成はつぎのようである。

題詠(東久世通禧)・序文(藤原陸光)・佐々木弘綱肖像9頁、

佐々木弘綱君小伝(福羽美静)8頁、緒言(佐々木信綱)2頁、

総目次等2頁、

詞のしをり 上編 雅語俗訳 目次2頁、本文426頁、

詞のしをり 中編 俗語雅訳 目次2頁、本文238頁、

詞のしをり 下編 熟語辞典 目次6頁、本文188頁、

仮字のしをり 仮字格辞典 目次2頁、本文178頁、

枕詞の葉 枕詞辞典

目次2頁、本文上編170頁、下編(受ける表現からの検索)50頁、

日本小文典

緒言(宮倉信好)2頁、目次4頁、

本文(佐々木信綱(関)、宮倉信好(編))72頁、

活語全図・活語試験(足代弘訓(著)、佐々木弘綱(補))22頁

俗語雅訳の部は、伊呂波順の排列をとっている。その本文の例。

やかましい かしまし かしがまし こちたし 耳かしまし あなかも (p.116)

さわつく そよめく にぎはゝしき

さ わ ぐ あわつ さやぐ そゝめく そよめく のゝしる ふためく とよむ

ざわざわする さゝめく そよぐ そよめく

さわぎたつて ゆすりみちて (p.162)

おなじく佐々木父子の著・補、博文館の発行で、同年内にさきだって、『詠歌自在』がある。それまでにででいたものをまとめたおもむきであり、雅語俗訳ももっているが、俗語雅訳はそなえていない。

松平円次郎・山崎 弓束・堀籠 美善『俗語辞海』

国立国語研究所に2種あって、初版、およびそれとおなじ月のうちに発行された再版である(ともに413.10 Ma 74)。以下の記述はそれらによる。

1909 明治 42 年、東京市、集文館発行。187 mm×127 mm, 1 冊。構成は、序(芳賀矢一) 4 頁、凡例等 6 頁、本文 1132 頁である。凡例につぎのようなところがある。

「本書は、今、世の中一般に行はれて居る俗語の意義を解きあかし、併せて文を作る時に必要な言葉を、俗語で引いて、其れに適当な和漢の文語を求められるように編纂したものである。

「書中、一語の下に挙げた文語の次に、其の語をつかった口語の句と、それを訳した普通文の句とをならべたのは、初学者に、其の詞のつかひみちをしらせやうとしたからである。……。

さて、この用例を挙げたのは、他の辞書には類のないことで、全く編者の創意である。」

本文はつぎのようである。

【さわがしい】(騒)(形)かまびすいさまにいふ。しづかでない。

騒し、聒噪なり、鬧噪なり、喧噪なり、嘩囂なり、嘩喧なり、喧鬧なり、喧囂なり、喧擾なり、噪敖なり、噪鬧なり、喧嚷なり、噪然たり、喧然たり、喧々たり、囂々たり、嗽々たり、嘖々たり、かまびすし、

さわがしいひとばかりだ。

囂々たるひとのみなり。

【さわがせる】(騒)(動)さわがせる。さわぐやうにする。

騒がす、騒乱せしむ、騒動せしむ、騒擾せしむ、

どなりあるいて、さわがせる。

怒号し廻りて騒乱せしむ。

(p.422)

この書については、類語辞典の濫觴として、なぜこのような口語文語対照辞書の形式で生じたか、どのような内容であるか、山田『近代国語辞書の歩み』(pp.705-711)がくわしくといている。この書の改題本についても、指摘がある。

芳賀 矢一(校閲)、志田 義秀・佐伯 常麿(編)『日本類語大辞典』

1909 明治 42 年、東京市、晴光館発行。1974 昭和 49 年、講談社復刻。1980 昭和 55 年、講談社学術文庫 494、495『類語の辞典(上、下)』として改題復刻。この復刻 2 点は、編者

子息志田延義の序文を付する。ほかに、現在でいう著作権・出版権にかかわる問題をもつ復刻もあると、林大(1976)が指摘し、その事情の調査を松田郁三(1977)が報告している。山田『近代国語辞書の歩み』(p.715)にも、同様の指摘がある。

自序(志田義秀)6頁、凡例・略語表6頁、字音表8頁、本文1777頁、地名異名類聚50頁、人名異名類聚25頁。

類語のうちに古語をあげている。俗語、方言もある。それらをかがけた理由は、序・凡例にいられていない。

本文の例。原文では漢語が多数かかっているが、最初の2個のみ例示し、ほか引用は省略する。そのほかでも、省略するところがおおい。

さわがし【騒】(形)「やかまし」を看よ。(p.679)

やかまし【八釜敷】(形)高き轟きや多くの声が入りまじりてさわがし。[聾][聵][喧][嘈][嘩][聒] 喧擾 喧噪 ……。かしまし(聾)。かしがまし(同上)。かまびすし(喧)。さわがし(騒)。さうゝゝし(騒々)。かまゝゝし(喧々)。みみやかまし(耳八釜敷)。みみかしがまし(耳聾)。<sup>①</sup>[古]かまし(聾)。わわし。<sup>②</sup>[俗]かしましい。こやかましい。<sup>③</sup>[貌]喧々 聾々 …… [比]蛙鳴 蛙鳴蟬声。(名)[古]かま(聾)。(副)[俗]がやゝゝ。がしやゝゝ。こてゝゝ。

◎いとはしき程——○惡聒。わるやかまし(惡八釜敷)。

◎言葉——○休乱。くちやかまし(口喧)。<sup>④</sup>[古]こちたし(口痛)。ことがまし。<sup>⑤</sup>[方]しやかまし(伊豆)[貌]喋々 聒々 ……

△噛みつく如く——○(副)[俗]がみゝゝと。

△漁夫の——○(名)あまのさへづり(蜚噂)。

◎はなはだ——○紛譁。あはやかまし(噫喧)。<sup>⑥</sup>[古]あなかしまし(嗟喧)。あなかまし(同上)。らうがはし。(感)[古]あなやかま(噫喧)。あなかま(同上)。(p.1569)

田沢 景忠(編)『懷中用稲廼門 俗雅辞典』

1912 明治45年ころまでに、東京市、速成作歌学会語学部発兌。144mm×89mm, 7冊。1冊は40-50頁。国立国会図書館にはこのうちの2冊があるが、つぎにふれる『雅俗辞典』と合本にされて、「雅俗辞典」のなをあたえられ(特53 884)、『明治期刊行図書目録』も「雅俗辞典」として記載している。

1913 大正2年にまとめて『懷中用稲廼門 俗雅辞典』1冊として発行されているよしであり、それについて、山田『近代国語辞書の歩み』(pp.502-505)は、日常の社会生活にひろく使用される言語として俗語をとらえていること、みだしに句・字音語をたてていることなどから、もっとも実用적であって推奨することができるとしている。

この編者は、同時に『懷中用稲廼門 雅俗辞典』を、同体裁で発行している。4冊。国立国会図書館にはそのうちの2冊がある(同番号)。<sup>⑦</sup>『俗雅辞典』と『雅俗辞典』とを、どのように関連させながら編集したか、わからない。ただ、一方を編集しなおして他方をつくったというようなものではなく、相互に独立しているらしいことは、できあがったものからうかがうことができ、それであるからこそ、山田の評価をえることもできたのであろう。



国立国語研究所に2種あって、初版とおなじ月のうちに発行された第4版、および改題版である(ともに413.14 Y 79)。つぎの記述は、それらによる。国立国会図書館にあることが目録にみえるが、現在は所在不明のよしである。

1929 昭和4年、東京市、交蘭社発行。167 mm×92 mm, 1冊。目次1頁、緒言2頁、凡例2頁、本文420頁。改題版は『詩歌作文 表現類語辞典』とし、緒言のひづけ(もとは昭和4年)を削除したほかは、本文は同一であるとみられる。いつ、なぜ、改題したのか、しることができないが、1934 昭和9年第10版では改題されている。

緒言につぎのようにある。

「凡そ文を草し、詩歌の制作に当つて最も困難を感じるのは、適切な辞句の発見である。……今や人として新時代に生きる者にとつて、読書は勿論、自らの内に懐く思想なり情操なりを、詩文の形に於て表はすべく、その技巧を修得することは缺くべからざる一つの資格となつてゐる。……我々は更に進んで、自らの想念を如何に適切に、そして如何に洗鍊された形に於て表はすかといふことに就いて、考究すべき時代に住んでゐる。が、そのためには先づ吾等の有つ国語の精髓を掴むことが肝要事である。」

また、凡例につぎのようにある。

「本書は世の学生並に一般人士の読書、殊に草文の場合に於ける便宜に供するの目的を以て、わが国語の精髓ともいふべき語句を類語的に編纂したものである。

「本書は力点を「云ひ表はし方」、即ち表現といふことに置いたので、一牽引語句の条下には、これと同種若くは同意味の類語を、古代より現代に亘つて萃めて置いた。殊に俗語を輯録したのは牽引の便宜と意義の捕捉に便ならしめるがためである。」

本文はつぎのようである。実は、古語・俗語であるむねの注記は、本文中にすくなく、つぎでもそれがみえない。体裁もとのわないところがある。みだしの排列は五十音順。

さわがし 騒し(形) かまびすし(囂)。さうがし。らうがはし(乱)。けたたまし。さうざうし。いそがし。やすらかならず。やかまし。

がやゝと一(喧擾・喧鬧)。かまびすしく一(喧囂・喧噪)。

さわぐ 騒ぐ(自) さやぐ。ざはめく。○あわて一(ふためく)。おどろき一(驚騒)。

あわて一(周章狼狽)。狂はしく一(狂躁)。声立てて一(喧嘩・号噪・叫噪)。みだれ一(紛擾・紊騒)。声たてて一(さんざめく・そめく・ぞめき)。心一(おぼしさわぐ)。たはむれ一(そばゆ・そばえる)。あばる。おびえさわぐ。わらひののしる。(自)さわぎたつ『さわやぐ・ひしめく・ざわめく・きしめく・とどめく・さわだつ・ざわつく。』(p.150)

1955 昭和30年、東京堂出版発行。

まえがき・凡例等4頁、本文685頁、付録(漢字音訓表・花ことば一覧・季題一覧・逆引枕詞序詞一覧)66頁。

まえがきにつぎのようにある。

「本書は、漢語・和語・古語・俗語・敬語・方言・成句などにわたって、ひろく類語・同意語の見地から、整理案配すると同時に、……。また、和歌・俳句・詩を作る人の便宜のため

に、花ことば・枕詞・季題などの一覧を、付録として掲げました。」

本文の例。凡例によるならば、▲は当用漢字にない漢字をふくむこと、[形]は形容語、[古]は古語、[方]は方言をしめす。ここでは方言の引用を省略する。

さわがしい〔騒がしい〕(形)▲喧噪▲喧擾▲喧囂▲喧雜▲喧轟▲噉嘈・騒々しい・やかましい[古]かしまし・かまびすし・らうがはし・ののしる・ののめく・さわがわし[方]……[形]▲喧々▲噴々・騒然▲噉々▲囂々▲聒然[古]さわさわ (p.282)

藤井 高尚『消息文例』

国立国語研究所に享和2年板がある(W43 F 57 1, 2)。以下の記述はそれによる。

1802 享和2年板。260 mm×185 mm, 2冊。構成は、上巻が、序(本居宣長)4丁, 凡例4丁, 目録4丁, 本文48丁, 下巻が、本文40丁, 跋3丁。跋文は1800 寛政12年のひづけをもつが、庵造巖(1975)の調査によるならば、板行はおくれるらしい。しかも、初板とかがえられるという享和2年板は、すくなかったらしく、現在あまりのこっていない。一般に流布したのは、1805 文化2年板であって、したにあげる影印も、それによる。上巻の後半から、候文用語と和文用語とが対照されている。辞書のかたちをとったものではなく、項目も、書簡用語にかぎられて、少数であるが、記述の精細であることを特長とする。

凡例につぎのようにある。

「歌よむ友どちらのせうそこには。をりゝみやび文を。かきかはす事のあなれば。さかしうさし出てこそものせずとも。人のおこせたらんに。かへりことすべきやうをだに。こゝろえおかずは。人わろきはぢもこそ。と近きとし頃。この事思ひわたるまゝに。いさゝかは思ひえたるふしもありけるを。ものに書しるして見ばや。と思ひなりぬるに……

「此ふみに。もの語に出たるせうそ此文をとり出るに。何がしにおくりたる。なにがしの文としるすは。そのおくりたるかたと。文ぬしの身のほどゝによりて。詞づかひを考る。たよりとなるべき事なればなり。

「むかしの例をひき出るに。同じ事のいとおほかるは。かたへはもらして。ひとつふたつしるせり。まれゝゝには。かずゝひき出まほしきに。その例のあまた見えぬは。あるかぎりしるしたるもあるなり。又うるさくしげくひき出たるもあるは。そのことのこゝろを。たしかにしめさんと。思ふをりのしわざなり。

「ふるき物語書はおほかるに。源氏のものがたりを。むねととり出たるは。あるが中に文のさまもめでたく。世のうた人のあけくれのまくらごとゝするものにしあれば。見るたよりもよかるべく。巻の数おほくことひろくて。例をひき出るにも。たらはぬ事なればなり。しかのみならず。詞のつかひざまも。あだし物語よりは。こよなくたゞしくなんあれば。これかれとたがへる事あるをりも。此ものがたりをより所としてさだめいへり。」

この書は、後世の消息・書簡の作法書に、影響をあたえている。聴雨庵川島茂樹『消息文梯』(1815 文化12年板)は、「文例にいはいく」として、この書の前半の数か条をそのままひいた。すぐつぎにとりあげる文苑家主人『消息文典』は、この書の増補版である。さらに、小田『和文消息全書』は、この書の後半の項目の一覧をのせた。

影印は根来司(1978)『消息文例』である。研究は、いまふれた庵造(1975)のほか、橘豊(1970)、今西浩子(1982)がある。

つぎに、後人による増補版についてしるしておく。

藤井 高尚(著)、文廼家主人(校補)『消息文典』

国立国会図書館にある(6 42)。以下の記述はそれによる。

1893 明治 26 年、東京市、中近堂発行。225 mm×145 mm, 2 冊。構成は、上巻が、はしがき(本居宣長) 2 頁、同(文廼家主人) 2 頁、凡例 6 頁、目録 12 頁、本文 88 頁、下巻が、本文 88 頁、てにをはの手引 14 頁。

校補の文廼家主人とは、雑誌・新聞の記事執筆・編集にたずさわった須永金三郎(1866 慶応 2 年生-1923 大正 12 年没)であろう。増補内容は、語法に関することがらがおおく、そのほかには、消息文とはなにか、音便とはなにか、といった数か条がある。しかし、古典の用例におよぶことはなく、『消息文例』の特長をのぼしているとはいえない。

黒沢 翁満『雅言用文章 上, 下』

国立国会図書館に 2 種あり(837 14 および 111 53)、さらに上巻のみの 1 種がある(特 1 878)。以下の記述はそれらによる。

1849 嘉永 2 年になつたらしいひづけがあり、それから 3 年後以降の板であることをしめすひづけもある。260 mm×183 mm, 2 冊。構成は、上巻が、序(1852 嘉永 5 年のひづけ) 6 丁、凡例(1849 嘉永 2 年のひづけ) 7 丁、目録 2 丁、本文 36 丁、下巻が、本文 47 丁、跋(1852 嘉永 5 年のひづけ) 2 丁。

凡例につぎのようにある。

「古歌の詞を。今の俗語に翻訳して。其心を明らむる事は。本居氏の古今遠鏡より始りて。早く其筋ひらけたれども。雅文を俗文に翻訳する事は。世にいまだ起らず。文といふ中にも。せうそこぶみは。全く今の世の手紙にひとしき物なれば。是を翻訳して明らむるは。なし安くして悟り安き事。必然あるべき理なり。されば昔のせうそこを。今の世の手紙の文に翻訳し。又今の手紙の俗文を。昔のせうそこぶみに翻訳し。雅俗互に訳しゝて。其趣を味ふれば。せうそこぶみかきならふには。是に増る道なし。然るに消息の事を。さだせるふみどもは多けれども。此筋におもむけたる物は。世に曾て有事なし。

「此書は用文章と云。俗書数部ありて。世にひろく行はるゝを見るに。年始五節句吉凶など。其外俗間日用の手紙の文言を。あまた書たる物なり。されば文字しらぬ人も。是によりて手紙のやりとりをなすことを得れば。俗文をかくには甚便よくして。ひろく俗人の為となれり。然るにせうそこぶみには。此類の物世にある事なれば。おのづからたよりあしく。書習ふ人もまれなるべし。いかで俗書の用文章の如き物を。雅言にて世にあらせばやと。いふ人の有につきて。かの用文章の俗文どもを。雅言に翻訳したるなり。

「雅文と俗文とは。又おのづから差別あれば。一字ごとに引あてゝは。文をなすものにあらず。前後の文意にて。其趣をうつすべきなり。本文にあげたる。雅俗の二章を味ひても悟るべし。」

本文の体裁は、2 段ぐみとしていて、上段に俗文すなわち候文を、下段に、それに対応する、雅文すなわち消息文を、配する。ただし、いま引用した凡例の最後にあるように、雅俗が逐語的に対応するというのではない。

本書は、国語学のうえからは、注目されることがほとんどなかった。わずかに永野賢

(1972)が注で、また佐藤喜代治(1977)、(1980)がふたつの辞典で、ふれたにとどまる。おなじく消息・書簡といいながら、うへの『消息文例』が多少なりとも注目されているのは、語彙論と文体論との発達の差に、帰せられるかもしれない。書簡作法の方面からは、しかし、本書もしられていて、あとにあげる小田『和文消息全書』には、本文全部の翻刻が収められている。

なお、本書にさきだって、おなじ著者につぎがある。

黒沢 翁満『消息案文』

---

国立国会図書館にある(156 47)。以下の記述はそれによる。

前編にあたる『全』1冊と、後編の『後編 上、下』2冊とからなる。

『全』は、1829 文政 12 年になり、1833 天保 4 年板。序(1833 天保 4 年のひづけ) 2 丁、本文 36 丁、跋 1 丁。「文言葉」と称して、俗語＝雅語の対照を若干あげているが、本体は、雅言を注解するところにある。雅言の排列は五十音順。

『後編』は刊記がない。『上』が、はしがき(1859 安政 6 年のひづけ) 2 丁、凡例(1850 嘉永 3 年のひづけ)・目録 8 丁、本文 42 丁。『下』が、本文 55 丁。凡例につぎのようにある。「此書は前編の文言どもを。書つゝるべき趣を。会得し安き為に。古き物語どもに出たる消息文を。あまたかきぬきて。其せうそこぶみの心を。今の俗文に翻訳し。雅俗二通となして並べ出せり。されば其二つを見合て。昔振の消息を。今の俗文にてかけば。かくの如き物といふ事を知。又俗文を。せうそこぶりにてかけば。かくのごとき物といふ事を見くらべておのづから其趣を辨ふべし」

源氏物語ほかの古典文芸作品から、消息 150 章を抜き出し、1 章ごとに、直後に、俗訳すなわち候文をそえている。

小田『和文消息全書』に、本文全部の翻刻が収められている。

小田 清雄(編)『普通対語 和文消息全書』

---

国立国会図書館にある(28 5)。以下の記述はそれによる。

1891 明治 24 年、大阪市、国文館発兌・赤志忠七発行。179 mm×122 mm、1 冊。凡例 20 頁、目録 6 頁、本文 300 頁。凡例につぎのようにある。

「此は藤井高尚の消息文例聴雨庵の消息文梯と黒沢翁満の雅言用文章、消息案文前後両編とを集成[あつ]めつる書なり」

本文の前半(1-160 頁)を『雅言用文章』の翻刻に、後半(161-289 頁)を『消息案文後編』の翻刻に、それぞれあてている。雅文を本文本体とし、俗文を、その右傍または左傍にそえるという形式で、原典ふたつの統合をはかっている。頭欄があり、『消息文梯』などの翻刻にあてている。

楓蔭三田村熊之介『言文対照 書簡文三ヶ月速成』

---

国立国会図書館にある(特 46 789)。以下の記述はそれによる。

1907 明治 40 年、大阪市、石塚書舗発行。121 mm×180 mm、1 冊。はしがき 2 頁、凡例 1 頁、目次 6 頁、本文 243 頁。凡例につぎのようにある。

「此書を繕く人は、先づ初に口語体の文を熟読して自ら試みに文章体に改作し、さて而る後

に本書の文章体と対照して其の可否を検すべし、」

種類の内容の書簡を90日分にわけ、その1日ごとに、この凡例のとおり、口語表現をあげたあと、対応する書簡文をあげて、さらに練習問題を付する。本文は、口語表現・書簡文とも、数をのぞいて総ルビがほどこしてあり、書簡文の用語には、適宜、左傍訓注がほどこしてある。

### 引用文献

- 赤堀又次郎(1902) 国語学書目解題。吉川半七。復刻1976年、勉誠社。
- 庵途 巖(1975) 国学者の文章観 —— 宣長・高尚を中心に ——。国文学論集(山梨大学)13 pp.30-41。
- 石井 久雄(1986) 古代的言語の享受と創造。文部省科学研究費補助金による一般研究(C)「古代(的)言語表現の享受と創造——現代日本語における」研究報告書。
- 今西 浩子(1982) 『消息文例』考 —— その国語学史上の位置 ——。竹岡正夫(編)国語学史論叢 pp.345-364。笠間書院、笠間叢書172。
- 小松 英雄(1985) 古典の表現に迫る辞書。佐伯梅友・森野宗明・小松英雄(編著)例解古語辞典 第二版、別冊 pp.2-10。三省堂。
- 斎藤義七郎(1983) イロハ順を五十音順に配列がえの 作歌用、里言・雅言対照辞書『詞葉新雅』。斎藤義七郎発行。
- 佐々木功昌(1991) データディスクマン —— ソニー。日本語学10.8 pp.91-94。
- 佐藤喜代治(1977) 仮名消息。佐藤喜代治(編)国語学研究事典 pp.360-361。明治書院。
- (1980) 消息文。国語学会(編)国語学大辞典 pp.492-493。東京堂出版。
- 佐藤 茂(1956 a) 『詞葉新雅』の意義。福井大学学芸学部紀要第1部人文科学5 pp.6-17。
- (1956 b) 言語と文学との一つの問題 —— 文語の口語訳をめぐる ——。文学24.6 pp.51-58。
- (1957 a) 文語表現の可能性 —— 表現と理解との一つの問題 ——。文芸研究(東北大学)25 pp.49-56。
- (1957 b) 国語史と国語学史。福井大学学芸学部紀要第1部人文科学7 pp.45-53。
- 佐村 八郎(1904) 増訂 国書解題。六合館。初版1900年。
- 鈴木 泰(1988) ウェイランド修身論の漢語訳語。刊行会(編) 此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢 pp.208-226。桜楓社。
- 総郷 正明(1976) 英和辞書にみる訳語の変遷。日本英学史学会(編)英語事始 pp.276-283。エンサイクロペディアブリタニカ(ジャパン)インコーポレーテッド。
- ・朝倉 治彦(1977) 辞書解題辞典。東京堂出版。
- 橘 豊(1970) 仮名書状の作法 —— 『消息文例』をめぐる ——。古典と現代32 pp.16-29。
- 建部 一男(1964) 「詞葉新雅」における里言と雅言。論究日本文学22 pp.32-44。
- =建部(1986) pp.49-75。

- (1979) 近世雅俗辞書における漢語系の俗語について。立命館文学 403・404・405 pp.276-295。  
 =建部(1986) pp.112-132。
- (1986) 近世日本文法研究史論。双文社出版。
- 月本 雅幸(1987) 空海撰述書の古訓点について —— その性格と研究の構想 ——。訓点語と訓点資料 77 pp.70-84。
- 永島 大典(1982) 英和辞書の訳語 —— 明治前期の文学用語をめぐる。佐藤喜代治(編)講座日本語の語彙 6 近代の語彙 pp.39-62。
- 中野 洋(1989) 英和辞典を和英辞典として使う。CL 研究(国立国語研究所言語計量研究部)3 pp.14-21。
- 永野 賢(1972) 藤沢親之『日本消息文典』の国語学史における位置。東京学芸大学紀要 第二部門人文科学 23 pp.165-171。  
 =永野(1991) pp.183-194。
- (1991) 文法研究史と文法教育。明治書院。
- 中村 幸彦(1964) 近世語資料としての詞葉新雅。語文研究(九州大学)18 pp.83-92。
- 根来 司(1978) 消息文例。和泉書院, 和泉書院影印叢刊 2。
- 蓮見 陽子(1991) 同一情報に基づく文章表現の異同についての分析。計量国語学 18.3 pp.136-144。
- 林 大(1964) 国立国語研究所資料集 6 分類語彙表。秀英出版。  
 —— (1976) 作文辞典。言語生活 302 pp.58-59。
- 林 巨樹・田代 美樹・渡辺千賀子・飯田 晴巳(1980) 江戸中期の国語について —— 古今集遠鏡訳文の助動詞研究 ——。青山語文 10 pp.142-172。
- 飛田 良文(未刊) 明治期以降英和辞書における現代人文関係用語訳語。国立国語研究所年報 32(1981 年) pp.43-49, 35(1984 年) pp.34-37, 41(1991 年) pp.49-55, など, 秀英出版発行, を参照。
- 福島 邦道(1969) 雅俗語対訳辞書の発達。実践女子大学文学部紀要 12 pp.205-218。  
 —— (1973) キリシタン資料。福島邦道(著)キリシタン資料と国語研究 pp.19-82。笠間書院, 笠間叢書 38。  
 —— (1984) 詞葉新雅〈ことばのしんが〉。編集委員会(編)日本古典文学大辞典 2 pp.645-646。岩波書店。
- 前田 富祺(1967) 指のよび方について。文芸研究(東北大学) 56 pp.41-53。  
 =前田(1985) pp.539-584。  
 —— (1980 a) 辞書との出会い —— 辞書をえらぶコツ・使うコツ ——。言語 9.5 pp.4-11。  
 —— (1980 b) 国語語彙史研究の課題。国語語彙史の研究 1 pp.1-28。和泉書院。  
 =前田(1985) pp.45-87。  
 —— (1985) 国語語彙史研究。明治書院。
- 増井 元(1991) 『広辞苑』CD-ROM 版 —— 岩波書店。日本語学 10.8 pp.86-90。
- 松田 郁三(1977) 日本類語大辞典とにせ本 —— 林大先生の疑問にも答えて ——。言

語生活 313 pp.90-91。

三木 幸信(1955) 類聚雅俗言。女子大國文(京都女子大学)2 pp.1-8。

—— (1968) 義門研究資料集成 下巻。風間書房。

三宅 清(1940 a) 富士谷御杖集 5。国民精神文化研究所, 国民精神文化文献 7。復刻 1979 年, 新編富士谷御杖全集 7, 思文閣出版。

—— (1940 b) 解題 詞葉新雅一卷。

=三宅(1940 a) pp.解 1-解 9。復刻版 pp.1-9。

—— (1940 c) 詞葉新雅。

=三宅(1940 a) pp.-1-139。復刻版 pp.59-199。

宮地 敦子(1979) 心身語彙の史的研究。明治書院。

宮島 達夫(1979) 共産党宣言の訳語。言語学研究会(編) 言語の研究 pp.425-517。むぎ書房。

—— (1980) 「助動詞」と「補助動詞」。近代語研究 6 pp.455-468。武蔵野書院。

—— (1987) 国立国語研究所報告 89 雑誌用語の変遷。秀英出版。

山内洋一郎(1982) 語史試論。国語語彙史の研究 3 pp.1-16。和泉書院。

山田 忠雄(1981) 近代国語辞書の歩み その模倣と創意と 上・下。三省堂。

湯浅 茂雄(1988) 雅俗対訳辞書類の俗語の性格 —— 鈴木朗『雅語訳解』を資料として ——。国語語彙史の研究 9 pp.151-179。和泉書院。